

---

# くじびき勇者さま 外伝 誰が真優勝者だ！？

あきらたろう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

くじびき勇者さま 外伝 誰が真優勝者だ！？

### 【Zコード】

Z8639P

### 【作者名】

あきらたりつ

### 【あらすじ】

HJ文庫から全1-1巻が出ている「くじびき勇者さま」の一次創作です。

原作では地味な勇者さまと化したナバル・フェオールを主役にします。

## 第一章 帝国剣術大会開催決定

アルテース西南戦争、世界大戦と立て続けに起こった戦争が終わり、東大陸のサクラス王国連合帝国では戦後復興と経済成長が起きていた。

戦争のために帝国全土に張り巡らされた鉄道網と有線放送網は、経済を成長させ、経済的に余裕のできた帝国社会では、様々な新しい娯楽が生み出されていた。

その一つが剣術大会であった。

剣術大会そのものは、古くからあり、アルテース西南戦争と世界大戦で多数の新兵器が開発されたため、剣術の価値が著しく下がったため剣術大会そのものも廃れるかと思われていた。

しかし、ある地方の小さな剣術大会を有線放送で実況放送したところ、大人気を呼んだ。

写真雑誌では、出場した剣士たちの写真が掲載され、特集記事が組まれるようになつた。

新たに発明された映画では、映画館で剣術大会を撮影した映像が上映され、それも映画館を満員にする大人気であった。

以前は、剣術大会の開催される会場が遠くて見に行けなかつた人も、鉄道により短時間で移動できるようになつたため、会場に来場する観客の数も急激に増加した。

剣術大会に出場する剣士は、スポーツのスター選手のように扱われるようになったのである。

帝国で一番大きな大会は、帝都サクラスで開催される帝国剣術大会であるが、デスペラン騒動・アルテース西南戦争・世界大戦により、ここ数年は中止されており、今年久しぶりに開催される大会は、大きな期待を持たれていた。

そして、今、前回の帝国剣術大会の準優勝者が報道陣に囲まれていた。

「勇者さま！前回の大会の準優勝者として、今回の大会に向けて何かコメントを…」

報道陣に取り囲まれているのは、勇者ナバル・フェオールである。

ナバルは面倒くさそうに答えた。

「俺は、準優勝だつたんだ。インタビューするなら、まず優勝者の方に先に行くべきだろ？」

「しかし、勇者さま。前回の大会の優勝者は今に行方不明ですか  
らね」

その新聞記者の言葉にナバルは怒った。

「あいつは行方不明になつてゐるんじゃない！剣の修業の旅に出て  
いるんだ！」

ナバルの剣幕にも怯まずに、新聞記者は質問を続けた。

「前回の大会の決勝戦で本当に勝つたのは、勇者さまだという話も……」

ナバルはさらに怒った。

「あの勝負は俺のハツキリとした負けだ！あいつが勝つたんだ！勝負にケチをつけないでくれ！」

その後、ナバルは報道陣を無視したまま、西アルテース公国の王宮であるコスマス宮の中に入つて行つた。

「凄い報道陣の数だつたわね。ナバル」

西アルテース公国の中の女王である聖女メイベル・ヴァイスは、ナバルと一緒にコスマス宮に入ったのだがメイベルには報道陣は誰一人として、近づかなかつた。

常に注目を集める彼女としては、新鮮な体験だつた。

「普段のわたしの気持ち分かるでしょ？人の注目を浴びるのなんて、わざらわしいでしょ？」

「ああ。メイベルが大統領や女王になるのを嫌がつていた気持ちが分かるよ」

二人は執務室に入ると、それぞれの書類仕事を始めた。

「ねえ。ナバル。ナバルは準優勝だったのよね？と言つ事は決勝戦で負けたのよね？」

「そうだ。あれは間違いない、俺の負けだ」

ナバルは自分が負けたことを悔しがるのではなく、むしろ誇るような言つた。

「さつき、新聞記者さんが本当に勝ったのはナバルという話もあるつて言つてたけど、どういう意味なの？」

ナバルは難しい顔になった。

「俺の口からは言ひにくい。クリプトン卿に聞いてくれ」

ちょうど、そこに西アルテース公国の執政責任者であるクリプトン卿が部屋に入ってきたので、メイベルは質問した。

「ふむ。あの決勝戦のことか、拙者も観戦していたが、あれは凄まじい剣の試合であった」

クリプトン卿は語り始めた。

決勝戦でのナバルの対戦相手の名前は、オクトー・アグディカース。

当時、西アルテースの公王だったビーズマス卿自慢のお抱え剣士である。

オクトーは帝国剣術大会に一回連続優勝しており、その大会で二連覇なるかどうかが、注目されていた。

ナバルも初出場で決勝進出ということでの、注目されていた。

「メイベル。少し、話は横にそれるが、オクターが最初に優勝した大会で疑惑が持ち上がったことがある」

「疑惑って何ですか？クリプトン卿」

「決勝戦以外は試合時間に制限があり、制限時間以内に決着が着かない場合は、審判の判定で勝敗が決まるのだから……ビーズマス卿が自分のお抱え剣士であるオクターを勝たせるために審判を買収したのではないか？？といふ疑惑だ」

「本当なんですか！？そんな不正行為が行われたのは？」

メイベルは、驚いて大声を出した。

そこに、ナバルが口を挟んだ。

「メイベル。オクターのヤツは、そんな卑怯なことをするヤツじゃない！」

クリプトン卿がナバルにうなづいた。

「うむ。ビーズマス卿が審判を買収しようと考えたのは事実のようなのだが、さすがに側近に止められて実行はしなかった。オクターは全く不正に関わっていないことは、判明している」

クリプトン卿は話を戻して、ナバルとオクターの間で行われた決勝戦の模様を詳しく話した。

その日の午後一時に開始された試合は、六時間経過した午後七時に

なつても決着がつかなかつた。

なぜなら、ナバルとオクトーは試合開始の合図があつてから木刀をお互いに構えたまま、ピクリとも動かさずにらみ合つていたからである。

「何故？六時間も動かなかつたの？ナバル」

マイベルの疑問にナバルが答えた。

「オクトーのヤツが、一撃で俺をノックアウトするのを狙つていたのは分かつていた。俺もオクトーも動きの速さは同じぐらいだ。俺がうかつに先に動くと、隙ができる、そこを突かれてやられてしまう。だからオクトーに先に隙ができるのを待つていた」

「何故？オクトーさんがノックアウトを狙つて分かつたの？」

このマイベルの疑問には、クリプトン卿が答えた。

「オクトーは買収疑惑をかけられてから、一言も弁解するようなことはしなかつたが、それ以降の試合では判定に持ち込まれたことは無い。全てノックアウト勝ちだ。誰も疑惑をかけられないノックアウト勝ちをすることで自分の実力を証明しているのだろう」

ナバルとオクトーのにらみ合いは六時間続いたが、剣術大会運営本部は「一人に動くよう促すことも、試合を中断するようなこともしなかつた。

なぜなら、帝国剣術大会は長い歴史と伝統を誇る大会で、決勝戦は

時間無制限であり、過去の試合では二日三晩にらみ合っていたこと  
もあつたからである。

「オクトーさんは何故先に動かなかつたの？ナバル」

「オクトーに直接聞いたわけじゃ無いから、これは俺の推測だが：  
…オクトーは自分が最初の一撃で俺をノックアウトするつもりだ：  
…と言う事を俺が分かつてることをオクトーも分かつている。先  
にオクトーが動いたとしても、俺に隙が無いなら返し技を受ける。  
お互に相手に隙ができるのを待つていた」

クリプトン卿が、試合の詳しい話に戻つた。

決勝戦は時間無制限でノックアウトか、どちらかがギブアップする  
まで勝負は着かない。

午後七時を過ぎて、屋外にある試合場はすでに暗くなり、かがり火  
が焚かれていた。

かがり火の灯りに照らされて、ナバルとオクトーのにらみ合いは続  
いていた。

その時、突然にわか雨が降つた。

雨でかがり火が消えて暗くなると同時に、二人は動いた。

かがり火が消えたことに一人とも僅かに動搖し、お互に隙ができ  
たからであつた。

一瞬の間暗くなり、観客にも審判にも一人の動きはハッキリとは見

えなかつた。

すぐに、大会運営本部の魔導師が灯りの魔法で二人を照らしたところ、ナバルが頭から血を流して気を失つて地面に横たわつており、オクトーは剣を打ち込んだ姿勢のまま立つていた。

当然、審判はオクトーの勝利を宣言した。

しかし、その判定に猛烈な抗議をした人物がいた。

審判から勝利を宣言されたオクトー自身であった。

「ギブアップだ！ 審判！ これを見ろ！」

オクトーは審判に右手の親指を見せた。骨折していた。

「私がナバルの頭に打ち込むよりも先に、ナバルの木刀が私の右手の親指に打ち込まれていた！ 木刀、だつたから骨折ですんだが、真剣だつたら親指を切り飛ばされて、私はナバルの頭に打ち込む前に剣を取り落としていた。だからナバルの勝ちだ！」

魔導師の治癒魔法で目が覚めたナバルにも、オクトーは同じ事を言った。

「ナバル。 お前の勝ちだ！ 認めてくれ！」

ナバルは首を横に振つた。

「確かに、俺が頭に打ち込まれる前にオクトーの右手の親指に打ち込んだが……俺は向き合つてている内に自分の持つてているのが、木刀

で真剣では無いことを忘れていた。だから親指を切り飛ばすのを狙つたりしたんだ。俺のドジだ。その結果、俺は気を失つて倒れて、オクターは立っていた。明らかにオクター、お前の勝ちだ！」

ナバルとオクターはお互に、相手が勝つたと主張し続けた。

大会運営本部でも、どちらの勝ちか激しい議論になつたが、結局審判の判定通りオクターの勝ちとなつた。

「そういう事だったの」

クリプトン卿の話を聞いたメイベルは納得した。

「それで、オクターさんが行方不明つてのは、どういうことなの？」

クリプトン卿がメイベルの疑問に答えた。

「オクターは『私は剣の修行の旅に出る。次の大会でハツキリと決着を着けよう!』と言い残して、旅立つた。マスコミも取材しようと行方を探したんだが、今だに見つからないし、目撃情報も無い」

ナバルが明るい声を出した。

「大丈夫だ！帝国剣術大会が開催されるんだから、オクターのヤツも必ず出場のために来る！」

同じ頃、草木が生い茂った山の中を一人の男が歩いていた。

身長・体格はナバルと同じくらいだ。髪の毛と髭は伸び放題で顔を覆っていた。

着ている服は、長い間洗濯していないらしく汚れていた。

その男が長時間歩いていると、眼下に小さな村が見えてきた。

## 第一章 帝国剣術大会開催決定（後書き）

「」感想をお待ちしております。

## 第一章 山奥の小さな村 その1

山奥にあるこの小さな村は、村人全員で約百人しかいない。

山の熊などの獣を狩ったり、山菜を採ったりすることで生計を立てている。

距離的には帝都サクラスと近いのだが、帝都の住民と村の住民の間に行き来は、ほとんど無かつた。

なぜなら険しい山道を歩く以外、この村に行く手段が無かつたからである。

しかし、この日からは変わることになる。

帝都と村を結ぶセメントで舗装された自動車道が開通したのである。

「なんだか懐かしい光景ね。世界大戦の時の西大陸での道路工事を思い出すわ」

道路の工事現場で工事車両や作業員を眺めながらつぶやいたのは、ソルティス教の若い女性神官アステル・ラガナンだった。

「そうね。戦争が終わって西大陸から帰ってきて、そんなに経つていないのに、色々なことが懐かしいわ」

アステルに相槌を打つたのは、ソルティス教会の医師の中では実質的な最上位である修道女ティアマリア・ファーマシイだ。

「何といつても一番の思い出は、勇者くんがメイベルにプロポーズしたことね」

「いつ言ったのは、書記係の正修道女レジーナ・テルルだ。

彼女の正式な名前はもつと長いのだが、彼女は好んで自分をレジーナ・テルルと名乗る。

「ううううう、メイベルちゃん……ナバルも僕を差し置いて、メイベルちゃんに抜け駆けしてプロポーズするなんて……」

号泣しているのは、帝都近衛騎兵隊の小隊長の青年クラウだ。

クラウは自分が参加できなかつた世界大戦の戦場で、メイベルとナバルの仲がますます深くなつたことを聞いてから、ずっとこの調子なのだ。

彼のフルネームも長く、自分から何度も名乗つているのだが、他の人からフルネームで呼ばれたことはない。

「もう。クラウ。いい加減に諦めなさいよ。メイベルと勇者くんが、誰から見ても両思いなのは分かっているでしょ？それよりクラウは、あたしたち視察団の護衛なんだから、ちゃんと仕事してよね？」

号泣するクラウに、レジーナは少し呆れて話し掛けた。

帝国議会は交通網の整備を進めている。

帝国内の主要都市を結ぶ遠距離交通網は、鉄道によりほぼ完成したため、主要都市周辺の町や村を結ぶ近距離交通網の整備に取り掛か

つて いる。

この山道はセメントで舗装した自動車道をつくつ、空気エンジン自動車を走らせる方針である。

空気自動車は一般に普及させるために格安で販売されているため、村人の中には早くも購入して運転している人もいる。

レジーナたちは教会から派遣されて、工事の様子を視察に来て いた。

「そこ の男！止まれ！」

号泣していたクラウが、いきなり真剣な表情になり大声を出した。

レジーナがクラウの視線の方向を見ると、村の周りの森の中から一人の男が歩いて出て 来た。

その男の髪と髭は伸び放題で顔を覆つており、服は長い間洗濯していないいらしく汚れていた。

「獵師さんかしら？ いいえ、違うわね」

アステルは、その男を最初は獵師だと思つた。長期間山に籠もる獵師は、そのような姿になるからである。

しかし、その男は獵銃は持つておらずに、腰に剣を差していた。

（クラウさんが不審人物あつかいするのも無理ないけど……何者なのかしら？）

アステルが、そう考えていると、その男がいきなり剣を抜いて、アステルたちに向けて走り出した。

「剣士隊！その男を取り押さえろ！」

クラウの命令を受けて、剣士隊十人が剣を構えて、男の周囲を取り囲んだ。

「止まれ！止まらないと、斬るぞ！」

男は剣士隊隊長の警告を無視して、剣を振り下ろした。

男は瞬く間に剣士隊十人の手首を剣で打つた。剣士隊全員が剣を取り落として、痛みで手首をおさえていた。

「十人の剣士を瞬く間に戦闘不能にするとは…あの男はかなりの剣の達人のようです！アステルさんたち気をつけて下さい！」

クラウはアステルたちに注意を促した。

「銃器隊構え！止まれ！止まらんと、撃つぞ！」

クラウが部下の銃器隊十人に命令して、男に警告した。

銃器隊が装備している銃は、今では旧式兵器となっている先込め式の単発銃で、あえて威力を低くしてあるため三十メートル先の厚手の服を撃ち抜けない。

自動小銃が開発されているのに、帝都近衛隊が未だに旧式銃を装備しているのには、もちろん理由がある。

帝都近衛隊は「軍隊」ではあるが、実際にやっている仕事は「警察」としてのものがほとんどである。

テロ集団による帝都でのテロ活動や西大陸のドラゴンによる奇襲攻撃を除けば、普段相手にしているのは「敵」ではなく犯罪者である。サクラス帝国においては、犯罪者でも人権があり、よほど凶悪犯でもなければ、警察が逮捕するさいに殺してしまつたら社会問題になる。

そのため警察は、なるべく容疑者を傷つけずに逮捕しようとする。

南アルテース西南戦争・世界大戦で開発された銃火器は、殺傷能力が強過ぎて一般的な警察業務には使えないものである。

サクラス帝国における警察は、軍隊が機関銃や戦車を装備して大きく変化したのに対して変わつておらず。剣士・魔導師・旧式銃の銃器隊が、相変わらず主力である。

剣や攻撃魔法ならば相手を殺さないよう手加減して攻撃できるし、威力を弱めた旧式銃なら相手に怪我をさせても、即死させる可能性は低いからである。

一般人相手ならば旧式銃とはいえ十人から銃口を向けられれば、それだけで怯えて足を止めるのが普通であった。

しかし剣を抜いた男は、自分に向けられた銃口を無視するよう、アステルたちに向かつて走り続けた。

クラウとしては銃器隊に発砲させるつもりはなく、男を止めるために銃口を向けさせたのだが、男の行動を見て次の命令を出した。

「三十メートル以内にあの男が来たら、撃て！」

命令すると、同時にクラウはアステルたちに近づいた。

「皆さん。銃器隊が突破されたら、僕が最後の盾になります。僕があの男と戦っている間に、逃げてください！」

アステルたち三人は自分たちも戦うと言つたが、クラウは反論した。

「皆さんは戦争に参加したとはい、司令部の業務がほとんどでしたでしょ？近接戦闘の経験は少ないはずです。レジーナ。きみの言つとおり僕は護衛なのですから、護衛としての仕事をさせてください」

「クラウ。あなたが、そんなに頼もしいことを言つなんて……」

レジーナは本気で、クラウの言葉に感激していた。

クラウは口には出さなかつたが、内心では後悔していることがあつた。

(アステルたちの護衛を命じられた時、この辺りは治安も良いから、僕自身と剣士隊十人・銃器隊十人で護衛は充分だろうと判断してしまいましたが……こんなことになるなら剣士や魔導師をもつと大勢連れて來るのでした)

クラウは走つて來る剣を抜いた男を見た。

（しかし、あの男は何者だらう？山賊ならもつと大勢で襲い掛かつてくるだらうし、テロという感じでも無い）

銃器隊が一斉に男に向けて発砲した。

しかし、男の走る速さは変わらなかつた。

「全弾ハズレだと？馬鹿な旧式銃の命中率は悪いとはいえ、十人が三十メートルで撃つて、一発も当たらぬなんて！」

クラウは言葉通りに、アステルたちの盾になろうと剣を構えた。

しかし、男はクラウたちの予想外の行動に出た。

男はクラウもアステルたちも無視して、クラウたちの背後の森の中に駆け込んだのである。

クラウたちが背後を振り向くと、巨大な熊を男が剣の一撃で倒しているところであつた。

その光景にクラウたちが茫然としていると、男は懐からナイフを取り出して、熊の死体を解体し始めた。

「あの……何をしてるんですか？」

アステルが茫然自失から回復して、男に話し掛けた。

「熊の肉は食べるとうまいし、毛皮は着ると暖かい」

男は、それだけ答えると熊の解体を続けた。

男の着ている服は、よく見ると熊の毛皮から作られた物であった。

男の服には、できたらばかりの銃弾の穴が数個開いていた。

「ちょっとー弾が当たっているじゃないのーティアーー治療をお願い！」

アステルに頼まれて、ティアマリアは男の傷の診断をした。

「厚い毛皮を着ていたから、幸い大きな傷にはなってはいないけど……かなり痛いはずよ。普通の人間なら痛みで動けないはずだわ」

ティアマリアは男に治癒魔法をかけた。

「治療感謝いたす。私が倒したあの十人の剣士たちにも、治癒魔法をかけてくれ。手加減したから、すぐ治癒魔法をかければ傷も残らんはずだ」

アステルが、ようやく状況を理解して男に話しかけた。

「あなたは、わたしたちを襲おうとしてた熊を倒してくれたのね。感謝するわ。でも、それなら、そうと言つてくれれば誤解されずに済んだのに……」

「私がいた位置からでは大声で叫んで、警告することになる。熊を刺激することになり、かえつて危険だ。私が、この手で熊を倒すのが一番手っ取り早い。ラガナン殿」

「えつ！？何で？わたしの名前を……」

アステルは見覚えのない男が自分の名前を口にしたので驚いた。

「貴女はアステル・ラガナン殿であろう？」

男は、さらにティアマリアに顔を向けた。

「こちらはティアマリア・ファーマシイ殿」

ティアマリアも男とは初対面のはずなので、自分の名前を呼ばれて驚いた。

男はクラウとレジーナの方も見た。

「そちらがユーベラス公国アキロキヤバス公王の三男のロード・クラウ・アスピス・リ・フローレス・ド・アキロキヤバス・ユーベラス殿。それに東アルテース公国テルル公王の孫娘のレジーナ・ラ・ルース・ド・テルル・アイシア・アルテーズ殿」

クラウとレジーナは友人からも呼ばれたことの滅多にないフルネームを、見覚えのない男が口にしたので驚いた。

「あの……あなたのお名前は？」

アステルが全員の疑問を代表するように、男に質問した。

男は答えた。

「私の名前はオクトー・アグディカース。西アルテース公国のビー

ズマス公王のお抱え剣士だ

## 第一章 山奥の小さな村 その1（後書き）

「」感想をお待ちしております。

クラウが驚いた。

「帝国剣術大会の決勝で、ナバルと戦った。あのオクターさんですか？」

「その通りだ」

オクター・アグディカースがうなづいた。

「クラウ殿と私は、剣術大会で対戦したことがあつたと思うが？」

「ええ。その通りです。でも、その顔では分かりませんでした」

オクターは自分の髪も鬚も伸び放題の自分の顔を右手で触った。

「これでは分からぬのも、無理はないか、ところでナバルは元気なのが？」

「勇者くんなら元気でいるわよ」

オクターの質問にアステルが答えた。

「勇者？ 勇者とは誰のことだ？」

アステルたちは驚いた。ナバルがソルティス教の神事のくじびきで救世の勇者に選ばれたことは、サクラス帝国では知らない人間はないからである。

クラウが、さつきのオクターの発言を思い出した。

「オクターさんは自分のことをビーズマス公王のお抱え剣士と名乗りましたが、ビーズマス卿がどうなったのか知らないんですか？」

「公王陛下が、どうされたのだ？まさか！亡くなられたのか？」

アステルたちは、また驚いた。西アルテース公国の前の公王であつたビーズマス卿がアルテース西南戦争の敗北により、逃亡して行方不明になつていることは、帝国で知らない人間はいないからである。

アステルがオクターの姿を、じつくりと観察した。

髪と髭は伸び放題だし、着ている熊の毛皮の服は、素人が作つたものらしく雑な作りである。

「オクターさん。ひょつとして、あなたは長期間山に籠もつていて、人里に下りたことがないんじゃないの？」

「そうだ。ここ数年山に籠もり、剣の修行をしていた。腹が空けば山の獣の肉を食い。服が破ければ獣の皮を剥いだ。こうして人と話すのも数年ぶりだ」

「じゃあ。帝国剣術大会が、ここ数年中止になつていたことも知らないんですね？」

クラウの質問にオクターは驚いた。

「数年中止になつていただと？原因は何だ？」

アステルたちは言い淀んだ。それを説明するには、『デスペラン騒動・アルテース西南戦争・世界大戦について説明しなくてはならず。恐ろしく長い話になるからである。

アステルは少し考えてから答えた。

「そのことは後から話すわ。長い話になるから、こっちから質問だけどオクターさんはここ数年の社会の変化についてなにも知らないのね？」

オクターはうなづいた。

「私は剣術大会決勝の後、ずっと山に籠もり剣の修行をしていた。人と話すのは先程も言ったように数年ぶりだ」

クラウが今度は疑問をぶつけた。

「剣術大会が中止になつたことも知らなかつたのでしょうか？何故、毎年剣術大会が開催される時期に山から下りなかつたのですか？」

「前回のナバルとの戦いは不本意な結果に終わつた。自分が納得できるまで剣の腕前を上げるまでは剣術大会に出る気は無かつた」

オクターは自分の腰に差した剣をさすつた。

「ようやく自分の納得できるまで剣の腕を上げた。だから、いつも山から下りてきたのだ」

オクターは改めて真剣な声を出した。

「ところで、私の質問に答えてはくれぬか？ビーナス公主陛下はどうされたのだ？何故、帝国剣術大会は、ここ数年中止になつたのだ？」

みんなを代表してアステルが答えた。

「とにかく、夜になるまで待つて。夜になれば、一番分かりやすい説明方法ができるから」

同じ頃、西アルテース公国の首都サンウーヌスのコスモス宮の執務室では、メイベルたちが休憩のためのお茶の時間になつていた。

お茶のテーブルに着いたのは、メイベルとナバルとクリプトン卿、そしてメイベル付きの給仕係でメイベルの親友でもあるパセラ・アヴィシスの四人だった。

パセラが全員のお茶とお菓子を配り終えて、自分の席に座ると口を開いた。

「メイベルう。質問したいことが、あるのですがあ？」

「いいわよ。パセラ。何でも聞いて」

「国債つて、何ですかあ？」

メイベル、ナバル、クリプトン卿の三人は、ずつこけて椅子から落

ちをうになつた。

なぜなら、休憩時間までマイベルたちは国債についての書類の処理をしており、パセラもその手伝いを彼女が開発に関わった電気計算機を使つてしてはいたからである。

「パセラ。国債が何かも分からず、電気計算機で金額を計算していたの！？」

マイベルが驚くと、パセラがのんびりと答えた。

「ナバルさんから渡された書類の合計金額を出すように言われて、わたしは電気計算機に計算式と数字を入力していただけでしたからあ」

「もひ。パセラ」

マイベルが少し呆れていた。

「パセラさん。国債について俺から説明する」

ナバルが説明を始めた。

国債とは「国庫債権」のことであり、国が発行する債権である。

税金による収入だけでは国の財源が不足する際に行われる「借金」である。

「例えば、マイベルが国で、パセラさんが国民だとする」

ナバルはパセラの前に金貨一枚置き、メイベルの前に「国債」と書かれた紙を置いた。

「メイベル国政府が発行した『国債』を国民パセラが買つた」

ナバルは金貨をメイベルの前に動かし、「国債」と書かれた紙をパセラの前に動かした。

「これでメイベル国政府は金貨を手に入れられるし、国民パセラは『国債』を手に入れられる」

パセラは納得していなかった。

「はあ……」こんな紙切れ一枚手に入れても、何が得するのですかあ？」

ナバルは笑つて答えた。

「その紙には『五年後、利子として銀貨五枚を付けて返します』といふ契約が書いてあるんだ」

「あつ！ホントですか！」

パセラは紙に書かれたナバルの手書きの文字を見た。

「だから、五年後には……」

ナバルはメイベルの前に置かれた金貨一枚の上に銀貨五枚を乗せて、パセラの前に動かした。

「いひして、パセラさんの元に戻つてくるわけだ

パセラは喜んで笑つた。

「銀貨五枚！得しましたあ！確かに得をするのならば、みんな国債を買いますねえ」

そこで、パセラが疑問の表情になつた。

「でも、国は国債を買つてくれた人に利子を付けて返さなきや、いけないんですよね？国が返すお金を持つていなかつたら、どうなるんですかあ？」

「いい質問だ。パセラさん。今日、処理している国債の書類が、その問題なんだ。数年前のアルテース西南戦争の時に、前の公王であつたビーナス卿が大量に発行した『戦時国債』の返還期限が今年なんだ」

「戦時国債」とは、戦争の時に不足する戦費を調達するために発行される国債である。

アルテース西南戦争の時に、すでに財政難に陥つていた西アルテース政府は高い利子率の戦時国債を大量に発行した。

アルテース西南戦争の最初の方では、西アルテースが有利だつたため、西アルテースのほとんどの国民は投資目的で戦時国債を購入したのだった。

「だが、戦争終盤になると、誰の目にも西アルテースの敗北は明らかになつていつた。戦争の最後には、このコスモス宮を十万人の西

アルテース市民が取り囲んだが、軍も警察もビーズマス卿の命令を聞かず、市民の排除には動かなかつた。その理由の一つは軍や警察への給料がまともに払えない状況にあつたことなんだ」

ここで、パセラは自分が電気計算機で計算して出した数字を思い出した。

パセラは会計の知識は全く持つていないが、数学に関してはメイベル以上の秀才なので、自分が電気計算機で計算して出した金額の桁数がどんでもないことは、すぐに分かつた。

「ナバルさん。あんなにたくさんのお金を西アルテース市民のみなさんに返さなきやならないんですね? 西アルテース政府は、そんなにたくさんのお金を持っているんですねか?」

ナバルは、あつさつと答えた。

「無いよ」

パセラがナバルの答えに睡然としたが、ナバルは説明を続けた。

「ビーズマス卿が公王の時に、無理な出費をした影響がいまだに残つていて、西アルテース政府は酷い財政赤字なんだ」

落ち着いて説明するナバルに対して、パセラは激しく動搖した。

「何で? そんなに落ち着いているんですか? ナバルさん! 借金を返せなかつたら、西アルテースの市民さんたちはとても怒つて、ビーズマス卿の時みたいにコスモス宮を取り囲むかもしませんよ! そうなつたらメイベルも逃げ出さなきやならなくなります!」

「パセラさん。落ち着いて。西アルテース政府に金は無いが、金を返す方法は有る」

「その方法つて、何ですかあ？」

「簡単に言えば過去の借金を返すために、今、新しい借金をするんだ」

ナバルは具体的な方法を説明した。

今年これから、西アルテース政府は新しい国債を発行する予定がある。

今年の国債の売却で得た金を、戦時国債の返還に当てることになる。

パセラは疑問の顔になった。

「でも、今年の国債は誰が？買ってくれるんですかあ？西アルテースの市民さんたちは買つたりしませんよね？」

「買うのは、南アルテース連邦共和国政府だ。メイベルが大統領として連邦議会に提案して、承認される予定だ」

パセラは戸惑つた後、少し笑つた。

「何だか、それは裏技みたいで少しズルいですう。メイベル女王の借金をメイベル大統領が肩代わりするようなものですう。それに新しく出来た借金は、どうするんですかあ？」

「メイベルが西アルテースで起こした新興事業はうまく行っているから、数年後には税率を上げずに税収が上がる見込みだ。そうすれば借金は全額返せるから、財政赤字は解消される。今回の国債の発行は、それまでの一時的処置なんだ」

メイベルはナバルとパセラの会話を聞きながら、ずっと気になっていたことを思っていた。

（ナバルは今年の帝国剣術大会に出場する予定でいるけど、財政に関わる仕事が忙し過ぎて、剣の練習の時間がほとんど取れないでいるわ。財政のことは気にせずに剣術大会に専念するように囁づべきかしら？）

メイベルは「メイベル個人」としては、ナバルには剣術大会で活躍して欲しいのだった。

（でも……財政のことを任せられる人は、ナバルの他にはいないし……）

メイベルは「女王」「大統領」としては、剣士としてのナバルより、会計士としてのナバルを求めるのであった。

メイベルは公的な立場と私的な立場に挟まれて、ナバルに何も言いだせないでいた。

夜になつた。

山奥の小さな村では、野外に映画用のスクリーンが張られ映写機が用意されていた。

夜の闇を利用して、道路工事の作業員や村人へのレクリエーションとして、屋外での映画上映会が元々予定されていた。

映画のタイトルは、「聖女さまと勇者さま」。

メイベルとナバルの活躍を題材にした映画であった。

## 第三章 山奥の小さな村 その2（後書き）

「」感想をお待ちしています。

映画「聖女さまと勇者さま」を見ている間、オクトーは少しも動かず。一言も発しなかつた。

映画の内容は、デスペラン騒動・アルテース西南戦争・世界大戦におけるメイベルとナバルの活躍を映像化している。

以前はモノクロの無声映画しかなかつたが、この映画は音がついており、世界初のフルカラー映画である。

メイベルとナバルを映画の中で演じているのはもちろん俳優であるが、戦闘シーンは軍隊の協力により本物の戦車や機関銃を使用して撮影されている。

マウントテン・ドラゴンが出てくる場面では、もちろん本物のマウントテン・ドラゴンが出演している。

そうして制作された映像は、本物の戦場を撮影したかのようにリアルであり、映画を観る観客には実際に戦場にいるかのような臨場感があるので、サクラス帝国全土で大人気を得ている。

映画のラストシーンは、ナバルがメイベルにプロポーズするが、それに伴う神儀のぐじびきでナバルが「一年後に神儀のやり直し」のハズレくじを引いてしまい。二人の関係は一年間お預けになつてしまつた。

メイベルが「ぐじびきなんて大嫌い！！」と絶叫するのが、コメティックで描かれて終わりである。

映画が終わった後も、しばらくの間オクターは全く動かず声も発しなかった。

（やつぱり。ショックだったのかしら？）

アステルはオクターの様子を見ながら思った。

（無理もないわ。ここ数年の社会の急激な変化は、実際に体験したわたしでも戸惑うことがあるもの。ずっと山に籠もっていて、社会の変化を知らなかつたオクターさんには精神的にショックでしょうね）

アステルはオクターの表情から内心を読み取ろうしたが、伸び放題の髪と髭で顔が覆われているのでできなかつた。

「ラガナン殿」

オクターがアステルに顔を向けて口を開いた。

「何がしら？ オクターさん」

「ターロ・ウラシーマのおとぎ話を知つていいか？」

「もちろん。知つてるわ」

ターロ・ウラシーマの話は、サクラス帝国で有名なおとぎ話の一である。

ほとんどの人間は子どもの頃に、絵本で読んだり、親から聞かされ

たりしている。

話の内容は、山奥の村に住む獵師の若い男ターコ・ウラシーマが子どもたちにいじめられていた小さなドラゴンを助ける。

数日後に、ターコの家に助けたドラゴンが訪ねて来て「お礼に僕のご主人様のお屋敷に、『ご招待します!』と言つのだ。

ドラゴンに案内されて、ターコが山奥に向かつて、山奥に立派な屋敷があった。

ターコが屋敷の中に入ると、屋敷の主人は絶世の美女で、『ご馳走や美酒をふるまわれて、ターコは楽しく一夜を過ごす。

朝になると、ターコは屋敷を出て自分の村へ帰った。

ところが村に着くと、村にある建物も住んでいる村人も、ターコにとつて見知らぬものになつていた。

ターコにとつて屋敷で過ごしたのは一晩のことだったが、その間に村では百年以上の時間が過ぎていたのだった。

「私はまさしく、そのターコ・ウラシーマだ」

オクトーは自分自身を嘲る皮肉な笑い声をあげた。

「私が山に籠もり必死で修行している間に、剣術は戦場で役立たずになつっていた。私の修行は全て無駄だったわけだ」

オクトーは絶望するような声だった。

アステルは慰めるため、それを否定する言葉をかけたが、戦場での実戦経験がある彼女はオクトーの言葉が正しいと分かっていた。

「映画とやらに出てきた機関銃という武器は、全く訓練をしたことの無い素人でも引き金を引くだけで連續して弾を発射することができる。長年剣の修行をした私が機関銃を持つた素人には勝てないのだ！」

（理解が速いわね）

アステルは思った。

専門の軍人でも戦場に機関銃が登場した時、それが戦場を以前のモノと変えてしまつことに気づかなかつた人間は多いのだ。

「この状況では、剣術は廃れてしまつてゐるのだろう。剣術大会も開催されなくなるわけだ」

落ち込んだ様子のオクトーにアステルが、首を横に振りながら声をかけた。

「いいえ。オクトーさん。剣術大会は廃止されてなんかいないわ。むしろスポーツとして、ますます盛んになつてゐるの」

アステルはオクトーを元気づけようとして、そう言つたのだが逆効果だつた。

「スポーツか……かつては戦場の勝敗を決する兵法と言われた剣術

も、サッカー やベースボールのよつた玉遊びと同じ物に成り果てた  
か……」

ますます落ち込んでいるオクトーにアステルは、とにかく剣術から  
話題を逸らすこととした。

「ところでオクトーさんは、わたしの名前知つてゐるわよね？わた  
しはオクトーさんとは初対面のはずなんだけれど、何故知つている  
の？」

レジーナも話に加わった。

「あたしも、それは気になつてゐるのよね。あたしもオクトーさん  
とは初対面のはずなのに、あたしのフルネームを知つてゐるなんて  
……」

ティアマリアも不思議そつた顔をしていた。

「わたしも初対面のはずよ」

それに対しで、オクトーは不思議そつた声で答えた。

「何を言つておるのだ？三人とも以前一度会つたことが、あるでは  
ないか」

「いつ？どこでなの？」

代表してアステルが質問した。

「帝国剣術大会でだ。ラガナン殿は決勝トーナメントの組み合わせ

を決める神儀のぐじびきの時に立ち会つた神官の一人であつただろ  
う?」

アステルは思い出した。

「確かに、あの時わたしいたけど……あの時は神官は十人以上いた  
のよ。わたしのことだけ覚えているなんて……」

アステルは少し気持ち悪く思った。

「ラガナン殿。何か誤解しているようだが、私はあの時いた神官は  
全員覚えているぞ。正確には神官は十一人で名前は……」

オクトーはアステルも忘れていた神官全員の名前を正確に口に出し  
た。

「すごい記憶力ね」

アステルが驚いていると、オクトーはティアマリアとレジーナに顔  
を向けた。

ティアマリアは帝国剣術大会の時に医療係の一人としており、オク  
トーはその時の医療係全員の名前を口に出した。

レジーナは観客席の貴賓席に祖父のテルル公王と一緒に観戦してお  
り、オクトーはその時に貴賓席にいた全員の名前を口にした。

「オクトーさんは何故そもそも名前を知っているの?」

アステルの疑問にオクトーが答えた。

「剣術大会のパンフレットに書いてあった」

「覚えるほど、何度も読んだの？」

「いや。一度読んだだけだ」

「一度読んだだけで覚えているなんて、オクターさんの記憶力はすごいわね」

アステルが驚いていると、オクターは心底不思議そうな声を出した。

「人間が一度見た物を忘れるといつことがあるのか？」

同じ頃、西アルテース公国首都サンウーヌスのコスマス宮では、ナバルとメイベルが就寝時となり寝室に入っていた。

ナバルとメイベルの寝室は、もちろん別である。

ナバルとメイベルは周囲から「恋人同士」「婚約者同士」と見られているが、社会の一般常識として結婚前の男女が同じ部屋で寝るといつのは、かなり不道徳なことなので、そうなつてい。

ましてや、ナバルとメイベルはソルティス教会から勇者・聖女に認定されているため、道徳的に振るまつように求められているからである。

ナバルは自分の寝室の中で木刀を振っていた。

「一旦はベッドの中に入ったのだが、眠れなかつたのだ。

ナバルとメイベルの寝室は隣同士で壁のドア一枚で通じている。

「コスモス宮の使用人に見られることなく、お互ひの寝室を行き来することはできるのだ。

執事長が気を回して、そうしたのだが、二人は氣づかいで氣づいておらず。そのドアを使ったことは一度もなかつた。

そのドアが今、初めて開いた。

メイベルがドアを開けて、ナバルの寝室に入つて來たのだ。

「剣の練習していたのね。今、ちょっとお話しして良いかしら？ナバル」

ナバルがうなずくと、二人はベッドに並んで座つた。

二人とも着ているのは、寝巻きである。

メイベルは自分から話しかけてきたにもかかわらず。言いにくそうで、なかなか口を開かなかつた。

ナバルは長い付き合いなので、こういう場合は待つた方が良いと分かつていたのでメイベルに話を促すようなことはしなかつた。

ナバルは寝巻き姿のメイベルを見ていると、自分の心の中にモヤモ

ヤしたもののがわいてくるのを感じた。

朴念仁と言われているナバルではあるが、男としての欲望は人並みにあるのだ。

（マイベルの寝巻きのデザイン大胆だな。手足はむき出しだし、胸元は大きく開いているじゃないか）

普段マイベルが着ている聖女服は、それらを全て隠すデザインになっている。

ナバルの視線は、マイベルの胸元からチラリと見える大きくはないが形の良い胸に釘付けになっていた。

（あれ……？）

ナバルは気づいた。

「マイベル。ひょっとして、下着を着てないんじゃ？」

「うん。 そうよ」

マイベルはあっさりと答えた。

「なんで、そんなことを……」

ナバルは動搖していたが、マイベルは平然としていた。

「」の寝巻きは、この前パセラと一緒に買い物に行つた時に買ったお揃いなの。この寝巻きを着る時は下着を着ないのが、流行なんで

すつて！」

（なんて無防備な……ひょっとして、メイベルは俺のことを誘つているのか？いや、駄目だ！結婚前の男女が、そういうことをするのは！）

そんなナバルの内心の葛藤を知つてか知らずか、メイベルはナバルの手に自分の手を合わせて、ナバルの瞳を見つめた。

「ねえ……ナバル。自分の気持ちに正直になつて」

（メイベルが、ここまで積極的になつたんだ。男の俺がリードすべきだらう…）

「分かつた。メイベル。俺は自分の気持ちに正直になる！」

ナバルはメイベルを抱きしめようとした。

「それは良かつたわ」

メイベルは立ち上がりつてナバルから離れて、壁に立てかけてある木刀をナバルに渡した。

「思う存分に、剣の練習をして！帝国剣術大会に優勝するのが、ナバルの願いなんてしまよ！財政の仕事は、わたしも頑張つてナバルが剣の練習時間増やせるようにするから！」

（メイベルが俺に正直になれつて、そういう意味だったのか……）

「それじゃあ。お休みなさい。ナバル」

メイベルは自分の寝室に戻つて行つた。

閉じられたドアには、鍵は掛かっていないのだが、ナバルは追い掛ける気にはなれなかつた。

ナバルは悶々とした気持ちを解消しようと、一晩中剣を振ることになつた。

## 第四章 山奥の小さな村 その3（後書き）

「J感想をお待ちしております。」

## 第五章 帝都サクラスにて その1

帝国剣術大会開催まで、あと数日となつた。

ナバルとマイベルは今、帝都サクラスにいる。

滞在しているのは、西アルテース公国が所有している広大な屋敷だ。この屋敷は西アルテース公国歴代の公王が、帝都サクラスに滞在する時に使っていた屋敷で、現在の西アルテース公国の女王であるマイベルが引き継いでいる。

広大な庭では、朝早くからナバルが部下と剣術の練習をしていた。

ナバルの西アルテース公国における現在の役職は、近衛大隊長兼財政顧問である。

マイベルが隊長である近衛大隊の主な任務は、マイベルの護衛だ。

そのため普段は銃火器は配備されてはおらず、剣術が重視されている。

なぜなら、自動小銃や火炎放射器のような新兵器が開発された時に、それが剣や魔法のように特別な訓練をせずとも、たとえ子供であつても引き金を引くだけで大きな攻撃力があることは分かった。

それだけに新兵器が一般社会に流失して、犯罪に使われることをサクラス帝国の治安担当者は恐れた。

そのために新兵器の製造・管理に関しては法律により厳しい基準が設けられ、軍隊以外では保有・使用は禁止されている。

ナバルが指揮している近衛大隊も軍隊ではあるが、メイベルの護衛が任務のため、重火器で武装しては一般市民に脅威をあたえてしまったため、普段の武装は腰に差した剣のみである。

サクラス帝国の治安は現在は良好であり、その剣を実戦で抜いたことは世界大戦の終戦後、今のところ一度も無い。

かつては、帝都サクラスの周りに野盗が出るほど治安が悪い時期もあり、世界大戦の初期には西のフォレスト・ドラゴンの帝都奇襲により当時の大司教が死亡した時には、それに伴って起こった混乱により帝都周辺の治安は一時的に著しく悪化した。

大量に発生した野盗により、帝都周辺が好き放題に荒らし回られるような事態まで発生したのである。

そのため大司教直属の組織である帝都近衛隊の隊長は、メイベルを通じて南アルテース軍から放水戦車などの新兵器を大量に譲り受け、野盗討伐に投入した。

その結果、瞬く間に野盗は壊滅したのであった。

クラウは、帝都近衛隊が西大陸への遠征への不参加を決定したこと悔しがっていたが、帝都近衛隊の隊長は、国内の治安維持という任務を重視したのであった

ナバルが部下とやっている剣術の練習は、ナバルが部下に稽古をつけてやるという意味も、もちろんあるが、ナバル自身の帝国剣術大

会に向けての練習も兼ねている。

練習場の側では、マイベルがナバルの練習を見学している……といふことは無い。

マイベルは屋敷の奥の執務室で、不機嫌な顔をして、山のように積まれた大量の書類と格闘していた。

「あーっ！ もうっ！ 何で！？ わたしが処理しなきゃならない書類が、いつもの何倍も増えているのよ…」

「それは、いつもはナバルさんが処理している分まで、マイベルが処理しているから、ですぅ」

パセラがマイベルに冷静にツッコミをした。

「何で！？ ナバルの分の書類まで、わたしが処理しなきゃ、ならないのよ！？」

「そうする事を、マイベルが自分で決めたんですぅ」

また。パセラが冷静にツッコミをした。

「それは、そうだけど……こんなに大変だなんて、思わなかつたんだもの！」

マイベルがナバルの分の書類まで、自分で処理しているのは、もちろん理由がある。

ナバルは普段は、財政顧問としての書類仕事が忙しいため、剣術の

ための練習時間がほとんど取れないでいた。

それを見兼ねたマイベルが、帝国剣術大会が終わるまで、ナバルの仕事を自分が引き受けた事を申し出たのであった。

「それに普段は書類仕事をしている時には、ナバルと一緒にいられるのに、これじゃあ、離ればなれじゃない！せめて、ナバルが練習をしている側で仕事をさせてよ！」

「ダメですぅ。クリプトン卿がおっしゃっていたように、機密書類もあるんですから。庭に書類を出すわけにはいきませんですぅ」

パセラの冷静な対応に、マイベルは少し声を荒げた。

「戦争で西大陸に遠征した時には、砂浜で書類仕事をしていたじゃない！」

「あの時は、戦争中だったからですぅ」

マイベルのセリフだけを聞いていると、書類仕事をサボって文句だけを言つてはいるように聞こえるが、マイベルはパセラと会話しながら書類に目を通して、テキパキと処理していた。

マイベルは愚痴をパセラに向けてしゃべり続けているが、それはストレス解消のためである。

書類の処理を滞らせてしまえば、結局ナバルに負担がかかるため、マイベルは眞面目に仕事をしていた。

パセラは、それが分かっているからマイベルの愚痴の相手をしてい

る。

お昼近くになつた。

山のように積み上げられた書類も、だいぶ少なくなつた。

マイベルは疲労困憊して、机に突つ伏していた。

執務室のドアの前に、近づいて来る足音がした。

マイベルには、その足音がナバルだとすぐに分かつた。  
足音が一人分だけだつたからである。

なぜなら、執務室には機密書類が置かれているため警備は厳重であり、ごく少数の例外を除いて例えマイベルが執務室に呼んだ人間であつても、警備兵が同行しなければ、執務室のドアの前まで来ることもできないからである。

その数少ない例外がナバルである。

ドアが開く前に、マイベルは突つ伏していた机から体を起こして、疲労困憊の顔を笑顔に変えた。

「マイベル。仕事は進んでいるか？」

ナバルがドアを開けて、部屋に入ってきた。

「もちろん。見ての通り、順調よ」

マイベルは疲労をみじんも顔に出さず、笑顔で答えた。

昼食は、マイベルとナバルは一緒に食べる約束をしていた。

「ナバルの方は剣の練習の調子は、どうなの？」

「第一中隊の隊員には、まだまだ俺が稽古をつけてやらなければ、ならないヤツがいる。第一中隊には剣の振り方に妙な癖があるヤツがいるから、まずそれを……」

ナバルが自分の部下たちのことを話すのを、マイベルは遮った。

「やつじやなくて、ナバル自身の剣の調子よ」

「ああ。それならいつもと変わらないぞ」

ナバルはのんきに答えた。

「ねえ。ナバル。自分のための特訓でもしたら？ オクトーさんは凄い修行をしてきたみたいよ」

マイベルは部屋に置いてある数紙の新聞と数冊の雑誌を指差した。

どの雑誌の表紙も新聞の一面の記事も、今世間で一番注目を集めている帝国剣術大会である。

特に数年間行方不明だった前大会の優勝者、オクトー・アグディカ

ニスが帝都サクラスにあらわれたことが、話題をさらつていた。

オクターはマスコミの前には、まつたく姿を見せようとせず。インタビューにも応じないために、それがますます世間の想像力を刺激している。

「ソロリーンス新聞では『オクターは、山籠りの修行中にマウンテン・ドラゴンを剣で倒した』なんて書いてあるわ。もちろん。これは、いつものように捏造記事だけだ……」

マウンテン・ドラゴンは一体で兵士一万人分の攻撃力があるとも謂われ、口から岩をも溶かす灼熱の炎を吐く、いかに剣の達人であつても一人の人間が倒すことは不可能である。

「でも、この写真は本物みたいね」

メイベルは、新聞に載っている写真を指差した。

明らかに隠し撮りされたもので、伸び放題の髪やヒゲ顔が覆われた男が写っていた。

「ふーん。オクターのヤツは、今はこんな顔なのか、前の大会の時は髪もヒゲも伸ばしていなかつたけどな」

ナバルが、さほど関心の無い口調で言つのを、メイベルは不思議に思つた。

「ナバル。オクターさんはライバルなんでしょうか？ もつと強い関心を持つていると、思つていたんだけど……」

ナバルは、落ち着いた態度で答えた。

「もちろん。俺はオクトーを試合で倒したいと思っている。だが、それは自分の剣の腕がどれほど上がったのか確かめたいからだ。オクトー自身には、たほど興味は無い」

「でも、剣術大会で戦う相手の事を調べるのは、当然のだつて書いてあるし……」

「メイベル。それは雑誌に載っていた言葉か？」

ナバルが真剣な表示になつた。

「ええ。剣術大会の特集記事に書いてあつたわ」

「そりや。スポーツになつた今の剣術大会では、そうだろう。メイベルがいろいろな新兵器を発明したおかげで、戦場では剣術は役立たずになつたからな」

ナバルは腰に差した剣を触りながら、嫌な過去を思い出す表情になつた。

その表情を見たメイベルは慌てた。

「ナバル。わたしは、そんなつもりで新兵器を発明したわけじゃ……」

ナバルはメイベルに、安心できるように穏やかな表情を向けた。

「メイベル。安心してくれ。メイベルが新兵器を発明した事に文句

を言つてゐるわけじゃない。むしろ感謝してゐる。もし、メイベルが新兵器を発明せずに、西のドラゴンと戦争をしたら、帝国は滅ぼされてしまうからな。人間の剣術はドラゴンに対しては無力だ」

メイベルはナバルの言葉を聞きながら、ナバルが子供の頃から打ち込んできた剣術を自分が結果的に時代遅れにしてしまった事が精神的にショックだった。

「話を戻すが、今のようにスポーツになる以前の剣術大会では、相手の事を事前に調べないものだった。なぜなら、戦場では斬り合つて相手の事を事前に調べるなんてのは不可能だからだ」

ここでナバルは一呼吸置いて、話を続けた。

「だから、お互に剣を向け合つた瞬間に、相手の腕前を見極めなければならぬ。俺はそれができるし、オクターのヤツもそうだ」

そう言つて、ナバルはメイベルを優しく抱き締めた。

「安心しろ。メイベル。俺は勝つよ。昔の俺は何の目的も無く、剣を振つていただけだが、今はしつかりとした目的がある」

「目的って、何なの？」

「もちろん。メイベルと一緒に生きていくことだ」

パセラが一人の昼食を執務室に運んできたが、抱き合つて一人の様子を見て、音を立てないように昼食をテーブルに置いて、静かにドアを閉めて執務室から出て行つた。

同時刻、オクトー・アグデイカニスは昼食を食べていた。

場所は、宮廷に隣接する近衛隊の詰所の食堂である。

クラウの手配で、オクトーは近衛隊の詰所に寝泊まりしているのであつた。

## 第五章 帝都サクラスにて その一（後書き）

ご感想・評価をお待ちしております。

## 第六章 帝都サクラスにて その2

近衛隊の詰所の食堂で、黙々と食事をしているオクトーを近衛兵たちが、羨ましがつてゐる視線で見ていた。

「クラウ殿」

「何ですか？ オクトーさん」

テーブルに向かい合つて食事をしているクラウに、オクトーが声をかけた。

「他の者たちが私に向けてゐる視線の意味するところは、何なのだ？」

クラウはため息を吐いて、食堂の隣にある厨房の方を見た。

「あの光景を見れば、みんなが羨ましい視線で見るのは、当然でしょう？」

厨房には三人の若い女性がいた。

アステル、レジーナ、ティアマリアの三人である。

「あの三人は「ここ毎日朝晩の三度の食事」といふわざここに来て、食事を作つてゐるのですよ。羨ましい視線を向けられるのは当然ですよ」

「何故？ 私だけが羨ましい視線を向けられなければならないのだ？」

他の者も全員同じ物を食べているではないか?「

テーブルの席に座っている近衛兵たちの前にあるトレイには、オクトーが食べているのと全く同じ料理が並べられている。

アステルたちは詰所にいる近衛兵全員分の食事を作っているのだ。

クラウは呆れた。

「アステルさんたちは近衛隊の詰所に来て、食事を作ってくれるなんてことは以前は無かつたんですよ。オクトーさんがここに寝泊まりするようになつてから、そうするようになつたんです。オクトーさんのために食事を作ってくれているのに決まつているじゃ、ないですか!」

「私のために、アステル殿たちが食事を作ってくれているのが、何故?羨ましい視線で見られることになるのだ?」

クラウはますます呆れた。

「あの三人は性格に色々と問題があるので、恋人がないのですが……三人とも間違いなく美女です。美女に食事を作つてもらえるなんて、羨ましがられるに決まつているじゃないですか!」

「なるほど

オクトーは納得した。

「しかし、羨ましい視線を私に向ける必要は無いぞ」

「何故ですか？」

「一般常識としては、女性が男性のために料理を作るというのは、その男性に好意を持つていいからであろう? クラウ殿と近衛兵たちは、そう思つていいのである!」

「ええ、その通りです」

「しかし私の場合は、そうでは無い」

オクターの声には自嘲の響きがあった。

「アステル殿たちが食事を作ってくれるのは、私に好意を持つていいからでは無い。拾つた野良犬に餌を『えていいような気持ちなのである!』

クラウは少し怒つた表情になつた。

「オクターさん! その言葉は、あの三人を侮辱していますし、オクターさん自身も侮辱していますよ! レジーナちゃんたちは人を野良犬扱いするようなことはしません!」

オクターはクラウに向けて頭を下げた。

「アステル殿たちに対する侮辱に聞こえたのならば、それは謝罪しよう。しかし私自身が飼い主に捨てられて、道端で途方に暮れている野良犬の気分だったのだ」

オクターは食事をしていた手を休めた。

「あの山奥の村で映画を見せられて、世の中に大きな変化が起つたことを知られた。私の主君であつたビースマス卿は行方不明となり、数年間山に籠もつて修行していた剣術は無価値になつた。これから私はどうしたら良いのか分からなくなつていた。その私に生きたる田標を下してくれたアステル殿たちには感謝している」

「言つておきますけど、わたしは野良犬を拾つたなんて思つていな  
いわ。オクトーさん」

オクトーの背後につの間にかアステルが立つていた。

「野良犬と言つよう、森の熊さんよ。その外見は！」

オクトーは相変わらず髪と鬚は伸び放題であり、熊の毛皮の服を着  
ている。

「髪を切つて、鬚を剃つて、服を着替えたらどうなの？」

「風呂には帝都に来てから毎日入つてゐるし、服も洗濯して  
いるから、不潔では無い。きちんと清潔にしている。アステル殿」

「不潔だとか、そういう事を言つてるんじゃ、ないの！山籠りをして  
いた時には、その格好でも良いでしょ？けど、都會では都會での  
格好というものが、あるでしょ？」

「数年間、私はずっとこの格好でいたのだ。急に変えると、体の感  
覚が微妙に狂う。剣術の試合では微妙な違いで勝負が決まる」

「やつ。それなら、やっぱり帝国剣術大会には出るのね？」

「やはり、ナバルとの決着はつけねばならないからな」

「オクトーとアステルが会話をしていると、レジーナとティアマリアも近づいて来た。」

「アステル先生。駄目ですよ。オクトーさんを独り占めにしちゃ」

「そうですよ。オクトーさんは、わたしたち三人の共有財産なんですからね」

「アステルたちはオクトーと同じテーブルの席に座ると、食事をとり始めた。」

「オクトーさん。三年前の七月の天体観測についての記録のファイルは、どこにあるのかしら？」

「アステル殿。それは十三年前七月の棚に間違えて、入れられている」

「四年前の郵便の記録ファイルは？」

「レジーナ殿。一年前の電信記録のファイルと混同されている」

「五年前の診療記録は？」

「ティアマリア殿。宮廷図書館の地下蔵書庫の方に一般閲覧禁止の医学書と一緒にになっている」

世界大戦の開戦時に西のドラゴンによつて行われた帝都サクラス奇

襲は、当時の大司教サンクトゥスハ世を初めとして大勢の死者を出している。

重要な建物の被害としては、聖サクラス教会の大聖堂が爆発し倒壊した。

大聖堂の西隣にある帝国議会議事堂も一部崩壊し、東隣にある公文書館は壁が崩れて中が丸見えになつた。

今、アステルたちがオクトーと話しているのは、公文書館に保管されていた書類に関することだ。

公文書館の壁が崩れたため、保管されていた書類は一時別の場所に保管されることになつた。

しかし、奇襲に伴う混乱により書類の移動記録が録られなかつたため、どこに保管したのか分からず。行方不明になつた書類が大量に発生した。

行方不明の書類の搜索は、今も続いている。

書類の搜索にアステルたちは、オクトーに協力してもらつことにしたのである。

アステルがオクトーに対して試験したところ、オクトーが驚異的な記憶力を持っていることが分かつた。

それでソルティス教会に古くから伝わる記憶術と速読術を、オクトーに習得するように勧めた。

記憶術と速読術がソルティス教会に古くから伝わっているのは理由がある。

ソルティス教の聖典は、今では印刷物になつており誰でも購読できる。

しかし印刷技術が発達する以前には、手で書いて書き写すしかなかつたため聖典は貴重品であり、地方の村では村の教会にある一冊の聖典が、その村の唯一の聖典であることが当たり前であった。

ソルティス教にとって重要な儀式であるくじびきを行うための数値表も聖典に載つている。

聖典が貴重品であるため、外に持ち歩くことはできないため、ソルティス教の聖職者が外出した時に信者からくじびきの神儀を頼まれれば、記憶だけを頼りに行わなければならない。

そのため記憶術と速読術が聖典を丸暗記するために、ソルティス教会において発達した。

現在では聖職者が聖典を持ち歩くようになつていて、くじびきの神儀を行うための数値表が聖典の後ろに付表としてあるが、「付表を見ずに行つてこそ、眞の神儀である!」と考える者も多いため記憶術は今でも盛んである。

「でも、わたしあくじびきの神儀の時にはいつも聖典の付表を見ているんだけどね」

アステルが悪戯っぽく笑つて言つのに対して、オクターが反応した。

「記憶力を試される試験を受けるのも無い限り、情報は全て覚えておく必要は無く、どこに情報が有るのかを覚えておけば良いとアステル殿は言つていたな。それなら何故、私には丸暗記させたのだ？」

「オクトーさんの記憶力がどれくらいのものなのか確認してみたかったのよ。まさか一字一句違わずに、読んだ書類全部覚えられるなんて凄いわ！」

「私は、その能力を使って書類の搜索に協力している。人の役に立てるというのは嬉しいものだ」

オクトーの声には心底から喜んでいる感じがした。

（良かつたわ。オクトーさんが立ち直つたみたいで）

アステルは思つた。

（勇者くんも自分が剣以外に能が無くて落ち込んでいた時、会計という新たな才能を見つけて立ち直つたらしいから……）

「レジーナ殿。これは書類の搜索とは関係の無いことなのだが、言つておかねばならぬことがある」

オクトーがレジーナに顔を向けた。

「西大陸に送つて いる外交文書の宛名なのだが……あれはマズい」

「何！？何が？マズいの？」

レジーナは戸惑つた。

「宛名が『西大陸臨時政府代表』となつてているのがだ」

西大陸にあつたドラゴン皇帝による帝国は崩壊し、現在西大陸を統治しているのは臨時政府である。

「それのどこが、マズいの？」

「西大陸の言葉に翻訳している言葉が『日が沈む方角にある大陸の仮初めの代表者』なのだ。こちらがサクラス帝国皇帝からの文書にだから相手を格下に扱つてゐる意味合いになる」

「そんな意味に翻訳されているなんて知らなかつたわ。でも西大陸から、そのことで抗議されたことは無いわよ？」

「向こうは、戦争に負けたのだから格下に扱われても仕方がないと思つてゐるらしいことが、向こうからの外交文書から読み取れる。しかし、サクラス帝国が対等の関係を築くつもりならば、マズいのではないか？」

「確かに、マズいわね。宛名を変えるよつて帝国議会に進言しなきゃ！」

アステルはオクトーの言葉に素直に驚いた。

（オクトーさんは単に文書を丸暗記するだけでなく、そこから得られる知識も確実に自分の物にしているわ）

昼食後、アステルたちはそれぞれの仕事場に戻つて行つた。

オクトーは自室に戻ると、部屋に山のように積み上げられた書類の束を読み始めた。

読みながら書類の内容の要約をメモしている。

「オクトーさん。剣術大会出場者の名簿が届きましたよ」

クラウが部屋に入つて来て、オクトーに名簿を渡した。

オクトーは右目で書類を読みながら、左目で名簿を見た。

「やはり、クラウ殿も出場するのか？」

「はい。ナバルには子供の時に剣術大会で僕はボロ負けしていますし、メイベルちゃんは取られちゃうし……僕もナバルとは決着をつけたいんですね！」

「色々と因縁があるものだな」

オクトーが出場者名簿に目を通していると、一つの名前に目を止めた。

「ブルーノ・アサツシニオ……書類で読んだが、彼もナバルに因縁のある一人だな」

同じ頃、ブルーノ・アサツシニオは帝都サクラスのホテルの一室で、

妻のヒリー・アサツシーオと会話していた。

## 第六章 帝都サクラスにて その2（後書き）

「感想・評価をお待ちしています。」

「やはり、わたしが帝国剣術大会に出場するのは反対ですか？エミー？」

ブルーノは、宿泊しているホテルの部屋でエミーと向かい合つていた。

エミーは厳しい表情をブルーノに向けた。

「アサツシニオ党の副党首のあたしとしては、ハッキリと反対するわ」

ブルーノとエミーは南アルテース連邦共和国の連邦議会議員である。政党アサツシニオ党の党首がブルーノであり、副党首がエミーなのだ。

「ブルーノ。あなたは、かつてこの帝都サクラスでテロ活動をしていた前歴があるわ。それに勇者ナバルと当時は従者だった聖女メイベルの救世の旅を妨害したという前歴もあるのよ。その意味するところは、分かっているわよね？」

いつたんエミーは言葉を切つて、ブルーノの返事を待つた。

「分かっていますよ。エミー。政治家としての今のわたしには、その前歴はマイナスにしかなりません。それどころか政治生命を失いかねません」

エミーはブルーノの言葉を受けて、うなづいた。

「やの通りよ。普通なら、あたしたちアサツシニオ党を追い落とそうとする他の政党は、その点を騒ぎ立てるだけで簡単に、ブルーノ。あなたを失脚させることができるわ」

エミーはますます表情を厳しくして、ブルーノに質問した。

「やうなつていない理由は、分かるわね？」

「アルテース西南戦争では、わたしは聖女メイベル直属の部隊の隊長として戦い。プライベートでも、わたしとエミーが聖女メイベルと勇者ナバルと親しいところを見せていくからでしょ？」

「その通りよ。それなのに剣術大会に出場して、勇者ナバルと戦おうとするなんて、あたしたちに対立する政治勢力に格好の攻撃材料を『え』えるようなものなのよ？」

「それは十分に承知しています。ですが……」

エミーは手を挙げて、ブルーノの続けようとした言葉を阻んだ。

「それは何度も聞いたわ。勇者ナバルと剣士として一対一の勝負をしたいんでしょ？まるで子供のケンカね。あなたはもつと計算のできる人なのだと思っていたのだけど……」

「エミー。わたしを軽蔑しますか？」

エミーは、蔑むような視線をブルーノに向けた。

「政治家のエミー・アサッショにしては、軽蔑するわ」

エミーは一転して穏やかな笑みをブルーに向けた。

「でも、ブルー・アサッショの妻のエミーとしては、あなたが何をしようとしていくつもりよ」

そしてエミーは座っているブルーの膝の上に乗ると、ブルーの頭を抱き抱えて自分の胸に押しつけた。

「もうっ！ 可愛いじゃない！ ブルーつたらっ！ そんな腕白な男の子みたいな一面もあるなんて！ ますます好きになっちゃうわよ！」

ブルーはエミーの腰を抱き返した。

「それは、あばたも笑窪というヤツでは、ないですか？」

ブルーとエミーをお互いを見つめ合つて、微笑み合つた。

ブルーとエミーは一人とも、二十歳代後半である。

しかし、ブルーが長身で二十歳代相応の容姿をしているのに対し、エミーは小柄で十歳代前半に見える容姿をしているので、夫婦が抱き合つているというより、年の離れた兄妹のように見える。

エミーは、自分の子供のように見える容姿を気にしている。

対立する政治勢力の議員から、エミーは「幼女議員」と面と向かつて言わされたこともあるし、ブルーは「ロリコン議員」と言われたこともある。

言われたその場ではブルーノもエリーも、その議員にこじやかに応対した。

しかし数日後に、その議員は「何者」かにスキャンダルを暴かれて失脚した。

「何者」かが誰なのかは「不明」ということになつていて。

「任せて、ブルーノ。今回は、政敵を潰すために使つていい手段を、あなたを助けるために使つから！」

次の日の朝、南アルテース連邦共和国大統領兼西アルテース公国女王である聖女メイベルは、朝食を摂りながら新聞の朝刊を読んでいた。

読んでいるのは、帝国タイムス、インペリアル新聞、ソロリエンス新聞の帝国三大全国紙である。

メイベルは政治家として、社会の動きを知ることは欠かせないので、毎日新聞を読んでいる。

「うーん。やつぱり、ここ数日、ブルーノさんのこと批判する記事が増えているわね」

「メイベル。ブルーノを批判しているって、何に対しても？」

メイベルのつぶやきに、一緒に朝食を摂っていたナバルが反応した。

「ブルーノさんが帝国剣術大会に出場して、ナバルと戦おうとしていることが批判されているのよ」

「何で、ブルーノが俺と戦おうとしているのが、批判されるんだ？」

ナバルが疑問の表情をメイベルに向けた。

「わたしとナバルの救世の旅の時に、ブルーノさんたちが、わたしたちのことを妨害したでしょ？ そのことを批判されているのよ」

「はあ！？ 救世の旅なんて、そんな昔のこととか！？」

メイベルは、うなづいた。

「そう。昔のことよ。わたしは気にしていないし、ナバルも気にしていないわ。でも、そのことを騒ぎ立ててブルーノさんの足を引っ張ろうとする人たちがいるの」

「だったら、その人たちに『俺たちは気にしていない』と伝えればいいんじゃないか？」

メイベルは首を横に振った。

「それは駄目なのよ。ブルーノさんがサクラス帝国に対してテロ活動をしていたのは、動かせない事実だし、消せない過去なのよ。政治的な取引の結果として、ブルーノさんのしたテロ活動は、犯罪として扱われてはいないから法律的には何も問題は無いのだけれど…

…「

メイベルは、読んでいた新聞記事をナバルに見せた。

「うーん。『ブルーノ・アサツシニオは帝国剣術大会において、再びソルティス教と戦おうとしている。過去に対する反省が無い』って大きく書いてあるなあ……。メイベル。俺たちの方からブルーノのために何かしてやることは、できないのか？」

メイベルは悩んだ顔になった。

「それができないのよ。その記事の裏には、南アルテースでブルーノさんを追い落とそうしている政治勢力が関わっているわ。その人たちは間違いなくソルティス教徒の政治家なのよ」

「ひょっとして、メイベル。この記事の黒幕が誰だか分かっているのか？」

「分かっているわ。大統領直属の情報部に調べさせたから」

「だったら、メイベルが大統領として、そいつに『止めろ』と言えば、済むんじゃないか？」

メイベルは顔を歪めた。

「わたしが『大統領』でソルティス教とドラゴン教両方の『聖女』だから、かえつてブルーノさんのために何かをすることは、できないのよ」

「どうじうじとだ？」

「ソルティス教徒とドラゴン教徒は、長年の対立関係から和解してお互いの撲滅を目指すような人々は激減したわ」

マイベルは、うんざりした顔になつた。

「でも政治や経済とかの分野で、ソルティス教徒とドラゴン教徒、どちらが主導権を取るかで、こだわっている人々は大勢いるのよ。ここでわたしが、ブルーノさんの味方をしたら『聖女マイベルがドラゴン教徒の側に付いた』なんて騒ぎ立てられるわ。下手をしたら、南アルテース内戦が再び起きる火種になりかねないのよ。だから、わたしはブルーノさんのために何かをすることができないのよ」

マイベルは、テーブルに広げていた新聞のページをめくつた。

「ブルーノさんは、奥さんのエミーさんはソルティス教徒だから、ソルティス教徒、ドラゴン教徒なんて枠には、こだわっていないんだけど……」

新聞を何となく、めくりながら、眺めていたマイベルは、めくつている手を突然止めた。

そして、そのページを真剣に読み始めた。

「どうした? マイベル? 何か興味を引くような記事でも、載つていたのか?」

マイベルは笑い出した。

「わたしが、何かする必要は無いみたいよ。ナバル。これを見て!」

メイベルはナバルに新聞を渡した。

「何だこりや？ 絵物語か？」

ナバルはメイベルが指差したページを見た。

「違うわ。マンガよ」

「マンガ？」

「そう。最近新しく発明された表現方法よ」

これまであった絵物語では、絵の横に文章が書かれていた。

マンガでは「フキダシ」の発明により絵の中にセリフが書けるようになり、それと「コマ割り」の発明により、絵物語より絵の表現に幅が出来た。

長身で長髪、メガネをかけた青年とボサボサの髪をした少年が、真剣を向け合っている。

憎しみの眼で、にらみあっている。

二人は真剣を交えて、戦いを始めた。

激しい戦いにより、お互いの真剣で傷つき、出血して一人とも地面に倒れた。

地面に倒れて動けなくなっている一人に、長髪の男には小柄な女性が、ボサボサ頭の男にはピンクブロンドの女性が近づいた。

女性たちは治癒魔法で、剣士たちを治療すると、真剣を取り上げて、木刀を渡した。

「木刀では、相手を倒すことができない」

男たちは抗議した。

女たちは言つた。

「あなたたちは、相手を倒したいの？それとも自分の力を相手に認めさせたいの？」

「相手を倒せば、自分が相手より強い証明になる」

「それならば、相手の命まで奪う必要は無いでしょ？戦場での剣術と違つて、スポーツとしての剣術は相手と競い合つことで、自分自身を精神的・肉体的に高めることが目的なのでしょ？」

二人の男は、うなづいた。

そして木刀を持つと、お互いに構えた。

今度は憎しみの田でにらみ合つのではなく、好敵手としてお互いを見つめ合つた。

そして試合が始まった。

「えー。このマンガの登場人物つて、俺とメイベルとブルーノとエミーさんがモデルだよな？」

新聞の一面に描かれていたマンガを読み終わったナバルは、メイベルにたずねた。

「そうよ。このマンガを描いたのは多分エミーさんね。新聞に広告料を払って自分のマンガを載せたのね。帝国三大紙全部に載つているわ。これは宣伝として効果的だわ」

「効果的って、何だ？」

「堅苦しい文章より、分かりやすいマンガの方が大勢の人が読むから影響力は大きいわ。これでブルーノさんを批判する記事の印象は薄くなつて、スポーツとしての剣術大会の印象が強くなるでしょうね」

メイベルの予想通り、ブルーノへの批判は大きな騒ぎとならずに沈静化した。

そして、いよいよ帝国剣術大会開催当日を迎えることになった。

## 第七章 帝都サクラスにて その3（後書き）

「感想・評価をお待ちしています。」

## 第八章 帝国剣術大会 その1

帝国剣術大会の開催日には、サクラス帝国の全土で教会や街の広場や公園などに、たくさんの群衆が集まった。

人が集まる公共の場所には、有線放送の受信機とスピーカーが設置されている。

個人で自宅に受信機を設置している家庭もあるが、まだ高価なため、ごく少数である。

そのため有線放送を聴きたい大多数の人は、自宅から出かけて、街頭放送を聴くのが普通である。

大勢の人々が、スピーカーから流れてくる音声に耳を傾けていた。

「……以上を持ちまして、帝国剣術大会開会式は無事に終了しました」

スピーカーから流れてくる音声は、女性の声だ。

「晴天の中。ここ帝都サクラスの帝立競技場は、十万人の大観衆！大会第一日目第一試合の開始を今か今かと、待っています」

ここで女性の声は、一拍置いた。

「放送の冒頭でも紹介した通り、この放送の実況担当は、わたくしレジーナ・テルルが、そして解説担当は……」

レジーナが言葉を切ると、男性の声が聞こえてきた。

「拙者、マーク・クリプトンがお送りする」

レジーナは話を続けた。

「さて、試合の前に改めて、剣術大会のルールを説明いたします。競技場の中央には直径百メートルの円形の試合場が設けられています。試合場の中央には開始線が一本有り、四メートル離れてあります。選手二人は開始線の上に立ち、お互いに構えた状態から、審判の『始め!』の号令で試合開始となります。試合時間は決勝戦以外は三十分、決勝戦は時間無制限となります。」

紙をめくる音が聞こえてきた。レジーナはルールが記載された書類を確認しているようだ。

「試合の勝敗は決勝戦は、選手のどちらかがノックアウトかギブアップするまでです。決勝戦以外は制限時間以内に勝負がつかなかつた場合は、判定になります。一試合で試合場から外に出るのが合計三回となつた選手は負けとなります」

レジーナは言葉を一旦切った。

「さて、クリプトン卿。ルールでは魔法の使用も可能となつていますが、そうなると、魔法が使える選手の方が有利ということになりますんでしょうか?」

「魔法が使える方が有利とは、限りません」

クリプトン卿は、レジーナの質問を否定した。

「魔法が使えると言つても、剣術大会ですので、攻撃魔法を相手にぶつけることは禁止されており、行つた者はただちに反則負けになります。試合中有効に使える魔法は飛行魔法だけになります」

「しかし、クリプトン卿。飛行魔法使える選手の方が有利だとう点は、変わらないのでは？」

「何をやつてもよい実戦ならば、そうです。飛行している人が地面に立つている人に対し、相手の武器の届かない高さから、魔法で攻撃したり、石などを投げつけたりと、一方的に攻撃できますから、有利になります。しかし、剣術大会では剣のみでしか攻撃が許されておりませんので、一方的に攻撃することはできません」

「それならば、飛行魔法でずっと飛んでいれば相手から攻撃されないのではないか？」

「そうですが、それだと判定負けになりますし、時間無制限の決勝戦では、飛行魔法を長時間使用すれば疲労した状態で地面に降りなければなりませんから、結局不利になります」

「なるほど、よく分かりました。あつー？第一試合の両選手が入場してきました！」

スピーカーからは十万人の観客の大歓声が聞こえてきた。

「注目の第一試合！出場選手の一人は、オクトー・アグディカニス。言わざと知れた前大会まで三回連続優勝！今大会に四連覇がかかっています。数年間山に籠もり修行したという成果を、どう見せるのか？クリプトン卿。わたしは前大会の時に一応この競技場にいた

のですが、オクター選手の試合内容を覚えていないのですか、ビのよつな剣士なのでしょう？」

「剣士は力タイプか技タイプか、どちらかに傾いている者が多いのですが、オクター選手は力と技のバランスがよく取れています。おそらく、巧みな試合運びを見せてくれるでしょう」

「なるほど、オクター選手は顔を覆うほどに髪と髭を伸ばし放題で、熊の毛皮の服を着ています。オクター選手、開始線の位置に着きました。審判の号令により、いよいよ試合開始となります」

「レジーナちゃん。レジーナちゃん」

クリプトン卿が、何かを注意するような口調になった。

「何ですか？クリプトンおじさま。放送の前に、レジーナ、クリプトン卿と放送中は呼び合つと決めたじゃない」

「レジーナちゃん。忘れてる。忘れてる」

クリプトン卿は、焦つた口調になつた。

「忘れてるって……。何ですか？」

「もう一人の選手の紹介を、忘れているー」

スピーカーからは、紙を慌てて引っ搔き回す音が聞こえてきた。

「『めんなさい。オクターさんにばかり注意して、忘れていたわ。もう一人の選手について書かれた紙は、紙は……』

レジーナの焦つた様子に、有線放送を聞いてる聴取者たちから、笑い声が上がった。

「あつ！？」

スピーカーから、レジーナの驚いた声が聞こえた。

それつきり、レジーナの声もクリプトン卿の声も聞こえなくなり、観客の歓声も聞えなくなつた。

十数秒が経過して、聴取者が「放送機器の故障か？」と思い始めた時、スピーカーから音が流れてきた。

さつきまでの何倍もの大歓声であつた。

「失礼いたしました。実況担当のレジーナです。十数秒間音が無かつたのは、放送機器の故障ではありません。有線放送をお聞きになつている皆様は、音のみですので何が起こつたのか、分からぬいでのしょうから、ただ今より詳細を説明します」

レジーナは気分を落ち着けようとしているらしく、何度も息を吸つたり吐いたりする音が聞こえた。

「オクトー選手は、審判の『始め！』の号令と同時に動き、相手選手を頭部への木刀の一撃でノックアウト！一瞬で勝負を決めました！あまりに素早く見事な一撃に、わたしも観客も呆然としてしまいました！十数秒間、無言となつてしましました」

レジーナの放送を聞いている聴取者からも、歓声が上がった。

「いやーちょっと、待つてくださいー！」

レジーナは怪訝な声を出した。

「主審はオクター選手の勝ちを宣言しましたが、審判員一人が異議を申し立てました」

スピーカーからは観客が騒めく声が流れてきて、スピーカーの前の聴取者も騒めいた。

「申し遅れましたが、剣術大会では審判は五人います。試合場の中に主審が一人、東西南北に審判員が一人ずつです。審判員一人は何を異議の申し立てをしているのでしょうか？あつー？今、情報が入つてきました！」

レジーナはメモの紙を渡されたらしく、それを読み上げた。

「情報によりますと、審判員一人は主審が『始め！』の号令をする前に、オクター選手は動き始めたと主張しているようです。クリプトン卿。こういう場合は、どうなるのでしょうか？」

「号令の前に動いたのが事実ならば、その選手は反則負けになります。しかし、拙者の個人的な見解ですが、オクター選手は号令と同時に動きました。何ら反則行為はしていません。しかし、剣術大会の判定は審判に任せられているので、拙者は口を挟めません」

「なるほど、審判団の協議の結果を待ちましょう」

その後、十分近くが経過した。

「審判団の主張が食い違い。なかなか結論が出ないようですね。審判団が判定できない場合は、どうなるんでしょうか？クリプトン卿」  
「その場合は、ソルティス教の神官によるくじ引きの神儀で判定が決まり……」

「あつ！？貴賓席にいるメイベルから……。いや、貴賓席にいらっしゃる聖女メイベルから何か提案があるようです。回ってきたメモを読みますので、聴取者の皆様は少々お待ちください」

「レジーナちゃん。メイベルは、何を提案したのかね？」

「ちよつと、待つでよ。おじさま。えー、聖女メイベルは試合が映画のために撮影されており、一秒間に七十コマの映像があります。それを見れば、オクター選手が主審の号令の前に動いたか、どうか分かるやつです」

「撮影した映像を見て判定するなんて、前例が無いぞ！」

「前例が無いので、審判団も聖女メイベルの提案を拒否しているようですね。どうやら審判団は神官によるくじ引きの神儀により、勝敗を決めることにしたようです」

スピーカーからメイベルの「試合の勝敗をくじ引きで決めるなんて、馬鹿らしいわ！」「前例が無いのは当たり前よ！撮影機ができたのは、つい最近なんだから！」「ナバルは見たのよ！オクターさんが号令と同時に動くのを！」と大声で叫んでいたのが、聞こえてきた。

「あつ！？聖女メイベルが飛行魔法で試合場の中央に降り立ちました！」

試合場では審判団にメイベルが怒鳴っていた。

「しかし、聖女さま。我々審判はルールブックに基づいて判定しているんです。前例の無いことを判定の材料にするわけには……」

困惑している主審に向かって、メイベルは自信満々に胸を張った。

「前例があれば良いのね？もちろんあるわよ。五十年前にね！」

「五十年前には、撮影機は無かったのでは？」

メイベルは説明を始めた。

五十年前には、写真機も撮影機も無かった。ソルティス教会の絵画係が試合の様子をスケッチしていた。

絵画係は写真機が発明される前は、事件や事故、イベントなどの記録を絵に描いて残すのが仕事だった。

当時の絵画係の一人に、特異な能力を持つ者がいた。

その人物は見たままを描くことしかできず。普通の人間が目で捕え

「ふー」とのできない一瞬を、捕えることができた。

そのため剣術大会での微妙な判定に、その絵画係の描いた絵が参考にされたことがあった。

「絵画係が描いた絵を参考にすると、撮影した動画を参考にするのも同じ事でしょう？前例はあるのよ」

「なるほど、そういう事でしたら……」

審判団は、メイベルの提案を受け入れた。

撮影された動画を見た結果、オクターが『令』と同時に動いたことが判明したので、オクターの勝ちとなつた。

このことより、あらゆるスポーツに映像による判定が導入される切っ掛けになつた。

「続きまして、第一試合です。」

レジーナがマイクに向けて声を出していた。

「ブルーノ・アサッシーオ選手の入場です！」

## 第八章 帝国剣術大会 その1（後書き）

ご感想・評価をお待ちしています。

有線放送の受信機のスピーカーからは、大歓声が聞こえてきた。

第一試合より女性の声が多い。

大勢の女性の声で観客席からの「ブルーノさま！頑張つて！」という声も聞こえてくる。

「第一試合の実況担当は、引き続き、わたくしレジーナ・テルル、解説はクリプトン卿でお送りします」

レジーナは一拍置いた。

「そして特別ゲストとして、第一試合に出場するブルーノ・アサツシニオ選手の奥様であるエミー・アサツシニオさんに放送席に来ていただきました。エミーさんよろしくお願いします」

「レジーナさん。もう一度言つてください」

エミーの声が流れた。

「えつ！？エミーさん。よろしくお願いします……」

「違いますーその前ですー」

「ブルーノ・アサツシニオ選手の奥様であるエミー・アサツシニオさん……」

「やう！それです！奥様……、ああ、何て素晴らしい言葉なんでしょう。一人から言われると、あたしがブルーノの妻である喜びがますます大きく感じられて……」

「あ、あの、Hミーさん……」Hリヒーは、うつむいた表情で固まつていなくて、仕事に戻つてください！」

「あつ！？すいません。レジーナさん。うつかりしていました。この場をお借りして、お伝えしなければならないことがあります」

「伝えなければならないこと？それは何ですか？Hミーさん」

「あたしの『夫』であるブルーノ・アサツシ二オが……」

Hミーは「夫」という言葉を強調した。

「写真雑誌にカラー写真が掲載されて以来、女性ファンが急増しました。今この競技場の観客席にも、あたしの夫であるブルーノ田当で来ている女性ファンが大勢います。放送を聞いている皆さんは、歓声を聞いてください」

「Hリヒー、Hミーはいつたん黙り込んだ。

観客の歓声は女性の方が大きく、ブルーノに向けての物がほとんどである。

Hミーは再び口を開いた。

「あたしの夫であるブルーノのファンになつた女性の皆さまの気持ちは、分かります。写真の通り、ブルーノは美男子です。整つた顔

立ちに、黒髪の長髪に……、長身にバランス良く伸びた手足……。  
すべてが！美しいんです！」

エミーは力強い声で主張した。

「素晴らしいのは容姿だけではありますん！豊富な知識の持ち主で  
あり、その知識を有効に活用することができます。部下思いの良い  
上司であり、妻であるあたし思いの良い夫であり……」

「ちょ、ちょっと待つてくださいー。エミーさん！」

レジーナがエミーを止めた。

「エミーさん。『主人のブルーノ選手の惚氣話でしたら、別の機会  
に……』

エミーは、レジーナの言葉の「『主人のブルーノ』」という所にだけ  
反応した。

「『主人……、はい！ブルーノはあたしの主人です！人から言われ  
ると、あたしとブルーノが夫婦である喜びが、ますます大きく感じ  
られて……』

「エミーさんー！つといた表情で固まつていないでー戻つて来て  
下さいー。」

「すいません。私が言いたいのは、放送をお聞きになつている皆さ  
んで、新聞や写真雑誌がお手元にある方は、ブルーノとあたしが並  
んで立つている写真が掲載されているページを見てくださいー

エミーは数秒間黙り込んだ。放送を聞いている人たちが、目的のページを見つけるのを待っている。

「見つけられましたか？写真の側には、ブルーノに対して、あたしが何者なのかの説明文がありますが……」

エミーは大きく息を吸うと、大声を出した。

「どれも、あたしのことを『ブルーノの妹』『ブルーノの従妹』『ブルーノの養女』と書いてあるんです！確かに、あたしは見た目は、十歳代に見えますけど、二十歳代後半のれつきとした大人です！『ブルーノの妻』なんです！新聞や雑誌の取材を受けた時に、そのことはちゃんと言つたのに！何を勘違いしてるんですか！」

「エミーさん！落ち着いてください！」

レジーナがエミーを鎮めようとしたが、火に油を注いだだけだった。

「これが、落ち着いていられますか！」

エミーは、興奮して放送席のテーブルを拳で何度も叩いている。

大量の紙が散らばる音がした。

「あつ！出場選手についてメモしておいた紙が、テーブルから落ちて、床に散らばっちゃったわ」

レジーナの嘆きを無視して、エミーは話を続けた。

「この記事のおかげで、ブルーノが独身だと勘違いして、『お付き

『合意してください』とか『結婚してください』とかの女性からのブルーノへの手紙が大量に届くんですよ!! 繰り返しますが、あたしエミー・アサツシニオはブルーノ・アサツシニオの『妻』です!!』

ヒーは「妻」を強調して言った。

「一度と！そんなふざけた手紙は送つて来ないでください！…」

「ブルーノ選手と相手選手が、双方開始線の位置に着きました。間もなく試合開始です」

レジーナがエニーを落ち着かせるのを諦めて、実況の仕事に戻った。エニーも言いたいことを言つたら、スッキリしたらしく落ち着いた口調になつた。

「レジーナさん。先程は、興奮してしまい。失礼しました。特別ゲストとして呼ばれたのですから、その仕事はきちんとしてます。あたしの夫であるブルーノの最初の動きを田を離さずに、よく見ていてください。きっと驚きますよ」

「HIII—やん。驚くと止め、じつこう。」

「レジーナちゃん。レジーナちゃん。また忘れてる。忘れてる」

クリプトン卿の声がした。

「何ですか？クリプトンおじさま。また忘れているといふのは……、あつー。」

レジーナは自分が何を忘れたかに気づいた。

「ブルー選手の紹介はしたけど、相手の選手の紹介は忘れていたわ。ええと、用意しておいた。メモは……、メモは」

レジーナがガサガサと紙の山をかき回す音がした。

「メモした紙が散らばっちゃつたから、どれがどれやら……、ええつ！？」

レジーナの驚いた声がして、クリプトン卿、そして観客席からの大勢の人たちが驚いた声がした。

冷静なエミーの声が受信機から流れた。

「放送をお聞きになつている皆様は、音だけですので何が起きたのが分からぬでしょから、今から説明します。審判の試合開始の合図と同時に、あたしの夫であるブルー選手は滑るように素早く後進して試合場の端まで移動しました。試合開始の時の木刀を構えた姿勢のまま手足はまったく動いていません。例えるなら、固形石けんが磨かれた床の上を滑るようになります。」

「このような特殊な動きは、今まで見たことはありません。エミーさん。ブルー選手は何か新しい魔法を使ったのでしょうか？」

「レジーナさん。あたしの夫であるブルーが使っているのは魔法ですが、昔からあるありふれた魔法です」

「ありふれた魔法！？」このような魔法は、見たことも、聞いたこともないですよ？」

「飛行魔法です」

「飛行魔法！？」

レジーナはエミーの答えに驚いた。

「レジーナさんが驚かれるのは分かります。普通戦闘での飛行魔法というものは、高い高度を飛ぶものですからね。第一試合でクリプトン卿が解説していたように飛行魔法が戦闘で有利なのは、地面いる相手に対して高い位置から一方的に攻撃できることですからね」

「でも、クリプトンおじさまが言つていましたが剣術大会では、木刀以外で攻撃すると反則負けになりますから、飛行魔法を使うのはあまり意味が無いと……」

「その通りです！だからわたしの夫であるブルーノは妻であるあたしエミーと協力して、飛行魔法を改良しました！」

「飛行魔法を改良？」

「あたしの夫であるブルーノは数ミリの高さを飛んでいるんです！」

「数ミリの高さ！？だから地面を滑つてているように見えるんですね？」

「その通りです。この飛行魔法が、剣術の試合でどのように有利になるのか、よく見ていてください」

「相手選手！すいません。名前を書いたメモが見つからないので、

「うつ呼ばせていただきます。ダッシュでブルーノ選手に向かって行きます！」

レジーナは実況の仕事に戻った。

「速い！ブルーノ選手！凄まじい速さで、相手選手から離れていきます！」

「あたしの夫であるブルーノは、時速約四十キロで数ミリの高さを飛んでいるのです。人間が普通に走る速さでは追いつくのは、不可能です」

「でも、避けてばかりでは、勝てないので？あつー？ブルーノ選手が、こちら……、放送席の方を向きました！」

「あたしの夫であるブルーノは妻であるあたしエミーに向けて手を振っています。あれは、次で相手に止めを刺すという合図です。よく見ていてください」

「あの、エミーさん？ そう何度も『妻』『夫』と口にされなくとも

……」

「あたしとブルーノが『夫婦』だと強調しておかないと、またふざけた手紙を送つて来る女性が出ます！木刀を構えたブルーノの姿は、あんなに凛々しくて格好良いんですよ。女性なら誰でも惚れてしまいます。妻であるあたしエミーも、改めて惚れてしましました。あ……、格好良い……、あたしがブルーノの妻だなんて……、今でも夢を見るみたい……」

「うつとつした表情で固まってしまったエミーさんのことば放つて

おいて、実況を続けます。ブルーノ選手今度は高速で、相手選手に近づいて行きます」

受信機のスピーカーからは、大歓声が聞こえてきた。

「勝負が着きました！ブルーノ選手、相手選手に高速ですれ違うと同時に相手のお腹に向けて横殴りに木刀を振るい、一撃でノックアウトです！相手選手、ブルーノ選手の高速にまったく対応できませんでした！」

試合終了後、ブルーノはエミーとともに新聞や雑誌の記者たちのインタビューに答えていた。

大勢のカメラマンの前で、ブルーノとエミーは口づけを交わして、それを写真に撮られたりもした。

インタビューが終わって、二人きりになると、ブルーノとエミーはお互いの顔を赤くした。

「エミー、わたしたちがキスするところを写真に撮らせるのは、やりすぎだったのではないですか？恥ずかしいですよ」

「あたしだって恥ずかしいわよ！ブルーノ！でも、これで明日の新聞の朝刊には、あたしとブルーノが『夫婦』だということが、写真の説明文にちゃんと書かることになるわ」

しかし、次の日の新聞朝刊には、ブルー・ノとエミーがキスをした写真の説明文には「幼い少女から、勝利の祝福のキスを受けるブルーノ選手」と書かれており、Hリーを怒り狂わせることになる。

「続きまして、第三試合になります！」

レジーナがマイクに向けて声を出していた。

「クラウ・アキロキヤバス選手の入場です！」

## 第九章 帝国剣術大会 その2（後書き）

ご感想・評価をお待ちしています。

有線放送の受信機のスピーカーからは、レジーナの声が流れた。

「クラウ・アキロキヤバス選手の入場……、のはずなのですが……」

レジーナの声は戸惑っている。

「クラウ選手が、まだ試合場に入場して来ません。いつたい、どうしたのでしょうか……、あつ！？」

レジーナの驚いた声が流れた。

「ちよつとーークラウ！何故？放送席に来ているのよ。もつすぐ、試合の開始時間よ。えつ！？名前を略さずに言つてくれ？分かったわよ。ロード・クラウ・アスピス・リ・フローレス・ド・アキロキヤバス・ユーベラス選手です。ほら、言つたわよ。このために、わざわざ放送席に来たの？」

放送席の机の上に、紙の束が置かれる音がした。

「何なの？この分厚い紙の束は？メイベルへの愛の言葉を書き連ねた物？放送で読み上げてくれ？クラウ。あんたねえ……」

レジーナは重い溜め息を吐くと、今度は怒声を放った。

「放送を私物化するんじや、ないわよーーわつと試合場に行きなさいーー」の紙の束も置いていかないで持つて行きなさいーー」

慌てて走り去る足音がした。

「放送をお聞きの皆さん、失礼いたしました。実況のレジーナ・テルルです。引き続き、解説はクリプトン卿、そして特別ゲストに…」

「」でレジーナは一拍置いた。

「第一試合に出場したブルーノ・アサツシニオ選手に来ていただきました。試合を終えたばかりで、わざわざ来ていただいて、ありがとうございます。ブルーノ選手」

「先ほどの、わたしの試合中には、妻のエミーが放送を私物化したようで大変失礼いたしました。夫として謝罪いたします」

「いえ。いえ。お気になさらずに、ブルーノ選手。エミーさんへの抗議の電話が放送局に殺到したそうですが、『エミーさんの喋りが面白い』という電話の方がはるかに多かつたので、放送を聞いた皆さまの間では、エミーさんの評判は良かつたようです」

「そう言つてもらえると、少しは気持ちが楽になります」

レジーナは話題を切り替えた。

「」の第三試合に出場する一名の選手を紹介いたします。一人目は、クラウ・アキロキヤバス選手。フルネームは省略させていただきます。ユーベラス公国出身で現在は、この帝都を守る近衛騎兵隊に所属しています。そして、もう一人は……」

レジーナが紙をめくる音がした。

「えつ！？何これ…？愛するメイベルちゃん。僕の愛を…、これ！クラウが持つてきた紙束じゃない！クラウ自分のと間違えて、あたしの放送用のメモの束を持って行っちゃったのね…また、選手の紹介ができないじゃ、ないの…！」

レジーナの嘆きをよそに、主審の試合開始の「初め！」の号令が鳴り響いた。

「初め！」の合図が観客の歓声で分かりにくいという批判もあったので、主審の声を拡声器で電気的に増幅して場内放送で流している。

試合開始と同時に大勢の観客の驚いた声がした。ただし、ブルーノが数ミリの高さを飛び飛行魔法を披露した時よりは声は小さかつた。

「クラウ選手。第一試合のブルーノ選手とまったく同じ動きをしています。木刀を構えた姿勢のまま、手足をまったく動かさずに試合場の端まで移動しました！クラウったら、ブルーノ選手の単なるモノマネをするなんて、プライド無いのかしら？」

「レジーナさん。クラウ選手の名誉のために言つておきますが、クラウ選手が今やっていることは、わたしの単なるモノマネではありません」

ブルーノがレジーナの言葉を否定した。

「どうこうことなのでしょうか？ブルーノ選手

ブルーノは解説を始めた。

「クラウ選手が今やっているのは、飛行魔法で数ミリの高さを時速約四十キロで飛ぶという。わたしが試合でやったことと同じです。しかし、この魔法は難しくて人のやったのを一度見ただけでは、できるようになりません。かなりの魔法の訓練が必要です。わたしとクラウ選手は、偶然にも同時期に新しい超低空飛行魔法を思ついたのでしょう。わたしの試合が先でしたからクラウ選手がわたしのマネをしたように見えますが、もしわたしの方の試合がクラウ選手より後でしたら、わたしがクラウ選手のマネをしたように見えたでしょう」

「そうなんでしょうか？ クラウ選手も飛行剣士としては、高いレベルにありますから、一度見ただけでもマネできるんじゃ、ないですか？」

レジーナは、イマイチ納得していないような声を出した。

「レジーナさん。超低空飛行魔法がどのくらい難しいのか、例え話で説明しますね。ベースボールのピッチャーがマウンドからキャッチャーにボールを投げる場合を想像してください」

「はい、ブルーノ選手」

レジーナはブルーノに相槌を打つた。

「プロのピッチャーの場合、時速百五十キロ以上の速さのボールを投げることも珍しくありませんが、時速百五十キロのボールを地面から数ミリの高さで投げて、ピッチャーの手を離れてから、キャッチャーのミットまでノーバウンドで数ミリの高さを維持したままのボールを届かせる」とはできるでしょうか？」

レジーナは少し考え込んで答えた。

「かなり難しいでしょうが、練習したいでは、できるようになります？」

ブルーノはうなづいた。

「その通りです。かなり難しいですが、練習したいではできるようになります。超低空飛行魔法は、今の例え話の何倍も難しいのです。かなりの練習をしなければ、できるようにはなりません。クラウ選手もわたしと同じように長期間の練習をして超低空飛行魔法を可能にしたのです。」

「なるほど、分かりました」

そこに大歓声が上がった。

「あつ！？実況担当のレジーナです。ただ今の大歓声の理由を説明いたします。クラウ選手が飛行高度数ミリの超低空飛行のままで、試合場を縦横無尽に動き回っています。飛行していると言つより、スケートで滑つているように見えます。ユーベラス公国で盛んななスポーツであるアイススケートによるフィギュアスケートの選手のように、華麗な動きで試合場を動き回っています」

ブルーノがクラウを称賛した。

「確かに華麗な動きです。かなり超低空飛行魔法を練習したのが、これからも分かります」

「見事な動きだと、拙者も思つが……」

解説のクリプトン卿が疑問を口にした。

「「」のフイギュアスケートのような動きは、剣術の試合としては、どのような意味があるので? クラウ選手は相手選手のことを無視して動き回っているように見えるが?」

ブルーノがクリプトン卿の疑問に同意した。

「確かに変な動きです。試合場に大きな円形の線を描くように、クラウ選手は同じ所をグルグル動いています」

「大きな円形の線を描くように、ですか?」

レジーナはブルーノの言葉を聞いて、クラウの動きを注意深く観察した。

そして何かに気づくと、呆れた声を出した。

「まつたく……、クラウったら、何をしているのよ……」

「レジーナちゃん。クラウ選手は何をしておるのだ?」

クリプトン卿の質問に、レジーナは呆れた声のまま答えた。

「ハートマークよ

「ハートマーク?」

「さう。クラウはハートマークを試合場に描くように超低空飛行を

しているのよ」

「本当だな。確かにクラウ選手は、ハートマークを描いてある。しかし、それに何の意味があるのだ？」

レジーナは答えるのが嫌そうな顔になつたが、答えないわけにはいかないので、搾り出すように声を出した。

「貴賓席で観戦しているメイベルに向けて、クラウは愛情表現をしているつもりなのよ。でも……」

レジーナは双眼鏡で貴賓席のメイベルを見た。

「メイベルはまったく気づいていないようね」

観客席から大歓声が上がった。

レジーナは実況の仕事に戻つた。

「クラウ選手、相手選手の待ち伏せにあいました。相手選手、ベースボールのバッター・ボックスに立つバッターのように高速で移動するクラウ選手を待ち伏せ。木刀をバットでボールを打つように振り、クラウ選手のお腹へ強烈な一撃！クラウ選手地面に倒れ込みました！クラウ選手、貴賓席の聖女メイベルの方ばかり見ていたため、相手選手の待ち伏せにまったく気づきませんでした」

ブルーノが呆れた声で解説した。

「時速四十キロは飛行魔法としては高速ですが、ベースボールのバッターが時速百キロ以上のボールを打てるよう、クラウ選手が同

じ「ースをグルグルと回っているのでは、相手は簡単に待ち伏せができます」

レジーナは実況を続けた。

「クラウ選手立ち上がりました。どうやらノックアウト負けはまぬがれたようです。あつ！？相手選手、飛行魔法で空中高く舞い上がりました！」

クリプトン卿が解説した。

「どうやら、相手選手はこれ以降は逃げ回って、判定勝ちを狙つていらぬようだ」

「どうこつこつとでしようか？クリプトン卿」

レジーナの質問にクリプトン卿が答えた。

「相手選手はすでにクラウ選手に一撃を決めている。このまま試合終了時間まで空中を飛んで逃げ回れば、相手選手の判定勝ちになる」

「しかし、クラウ選手も飛行して相手に追いつけば良いのでは？」

クリプトン卿はレジーナの言葉を否定した。

「人間が飛行魔法での最高速度は時速四十キロだ。クラウ選手も相手選手も同じ速度なのだから、クラウ選手は相手に追いつかない。どうやら、この試合はクラウ選手の負けのようだな」

「クラウ選手の勝ちですね」

ブルーノがクリプトン卿の言葉に重なるように言った。

「ブルーノ選手、どうしたことなのでしょうか？」

レジーナの疑問にブルーノは解説した。

「飛行魔法の最高速度四十キロというのは、直線で飛んだ場合です。曲がればスピードは落ちます。しかし、超低空飛行魔法を使えるようになると、時速四十キロのまま曲がれるのです。」

場内が大歓声になった。

「クラウ選手、相手選手が空中で曲がった時に追いつき、相手の頭部に木刀で一撃を決めました！相手選手地面上に叩きつけられました！クラウ選手、ノックアウト勝ちです！」

クラウは、試合終了後の新聞記者や雑誌記者などの報道陣の試合についてのインタビューにまつたく答えることはなく、一方的にメイベルへの愛の言葉を書き連ねた紙の束を報道陣に渡して、新聞や雑誌に掲載してくれるよう頼んだ。

その結果、その日の帝立競技場の「ミニ箱に捨てられる紙の量が普段より少し増加した。

「続きまして、第四試合になります！」

レジーナがマイクに向けて声を出していた。

「ナバル・フェオール選手の入場です！」

## 第十章 帝国剣術大会 その3（後書き）

ご感想・評価をお待ちしております。

「第四試合の実況担当は引き続き、わたくしレジーナ・テルル。解説はクリプトン卿でお送りします。そして……」

レジーナは一拍置いた。

「特別ゲストとして、聖女メイベル・ヴァイスさまにおいでいたたきました。聖女メイベルさま。よろしくお願ひします」

「メイベル・ヴァイスです。よろしくお願ひします」

メイベルはマイクに向けてそう言ひただけで、後は試合場の方を見て黙り込んだ。

レジーナは困惑した。

（メイベルはいつものように興味のある分野のことを延々と話すか、エミーさんみたいに勇者くんの惚氣話をするかと思っていて、長くなるようなら止めなきゃと思ってたのに……、メイベルが黙り込んだら、放送として面白くないわ。仕方ないわ。危険かもしれないけど、あたしの方から話を振りましょう）

「」の試合に出場される勇者ナバルさまは、聖女さまの長年のパートナーですよね？」

レジーナはメイベルにこう話を振れば、メイベルが長々とナバルの惚氣話をすると考えたので、それを止めることで放送を聞いてる人たちの笑いを取ろうとした。

「そうね」

メイベルはそう言つただけで、試合場の方を見て黙り込んでだ。

レジーナは、ますます困惑した。

（メイベルとは長い付き合いだけ、こんなに喋らないメイベルは初めてだわ。とにかく、思い付く限りのことをドンドン話に振ることにしまじょう）

「聖女さまは、南アルテースの大統領と西アルテースの女王を兼ねられていますから、お仕事は大変ではないですか？」

「そうね」

「今も、さまざまな新しい発明品の開発に取り組んでいらっしゃるようですが、どんな物を開発中なのでしょうか？」

「まあ、色々とやつてるわ」

レジーナは、他にも次々と話をメイベルに振つたが、メイベルは一言返事をするだけだつた。

（こんなメイベルを相手にするのは、調子が狂うわね。この話だけは振りたくなかったんだけど……）

「聖女さまは勇者ナバルさまよりプロポーズされたそうですが、くじびきの神儀により、勇者さまがハズレくじを引いてしまい『一年間お預け』になつたそうですね。今のお気持ちはいかがですか？」

レジーナは、その時その場にいてくじびきの串の入った筒を持っていた。

ナバルがハズレくじを引いてしまったことのメイベルの愚痴を長々と何時間も聞かされたのだ。

（この話を振れば、またメイベルは愚痴を長々と言うわ。そこを、あたしが止めて、放送を聞いてる人の笑いを取ると……）

レジーナは、そう計算したのだが……。

「別に……」

レジーナは座つたまま頭を机にぶつけて、ズッコケた。

（どうしたのかしら？今日のメイベルは？）

メイベルと会話する時には、周りの人間は自然と漫才で言いつての「ツツコミ役」になる。

メイベルが周りの空気を読まずに長々と話をする「ボケ役」になるので、親しい人間、例えばナバルやパセラがツツコミをして止めるのだ。

そのため、メイベルが長々と話すという「ボケ」をしないと、周りの人間が「ツツコミ」できないため、話が続かないのだ。

「聖女さまは、第一試合のオクトー選手の時に審判団に意見して映像判定を導入されましたが、勇者さまのライバルのオクトー選手の

味方をするよつたことをしたのは、『敵に塩を送る』ところモノで  
しょつか?」

レジーナはほととじ白棄になつて、この話をメイベルに振つた。

「いいえ。『敵に塩を送る』といつわけじゃ無かつたのよ。オクト  
ーさんの試合がナバルより先で良かつたわ」

レジーナはメイベルがよつやくほととじ反応したので、さらに話を  
振つた。

「何故? オクトー選手の試合がナバル選手より先で良かつたのです  
か?」

「だつてナバルの試合で、わたしが映像判定をするよつて意見する  
ことはできないじゃない。自分で言うのもなんだけど、わたしは聖  
女で、大統領で、女王なんだから、わたしが権威と権力を使って判  
定をナバルに有利なよつてねじ曲げよつとしているよつて見えるで  
しょ?」

レジーナは、メイベルの言葉の意味を数秒間考えた。

そして結論を出した。

「つまり、勇者くんも……、オクトーさんと同じ……」

「始まるわよー! レジーナ!」

レジーナが試合場の方を見ると、ナバルと相手の選手がすでに開始

線の位置に着いていて、主審の試合開始の合図を待つだけになっていた。

メイベルに話を振ることに夢中になっていたレジーナは、気づかなかつたのだ。

「よく見ていて、一瞬で終わるからー。」

主審の「初め！」の合図が鳴り響いた。

一瞬後に場内は、大歓声に包まれた。

「実況のレジーナです！ナバル選手は、主審の『初め！』の合図と同時に動き、相手の頭部への木刀の一撃で、ノックアウト！一瞬で勝負を決めました！第一試合のオクター選手と同じ結果です！」

観客席が今度は騒めいた。

「あつ！？主審はナバル選手の勝ちを宣言しましたが、審判員一人が『ナバル選手が試合開始の号令の前に動いたのではないか？』と主張しています。映像判定に持ち込まれるようです。これもオクター選手の試合と同じですね」

「レジーナ、言つておくけど、ナバルのしたことはオクターさんの単なるマネじゃないわよ」

「それは、どうこう」とぞしょつか？聖女さま

メイベルは深呼吸すると、張り切つて話始めた。

「剣の試合で、相手に必ず勝てる方法は何だと想つ?」

レジーナはマイベルの質問に、少し混乱した。

「ええと……、勝負はどう転ぶか分からないモノだから、必ず勝てる方法なんか無いんじやない?」

マイベルは、レジーナの答えにうなづいた。

「その通りよ。歴史上の有名な剣士の言葉で『最強の剣士とは、最弱の剣士との勝負を怖れる者だ』ということのあるように、強い剣士ほど勝負の怖さを知つてゐるのよ。だから勝負に必ず勝つには、勝負をしなければ良いのよ」

「あの……、マイベル……、そもそも勝負をしなければ試合にならないのでは?」

「ナバルが試合でやつたことを詳しく説明するわね。審判の試合開始の号令と同時に動いて、相手の頭を木刀で一撃してノックアウトする。言葉にしてしまえば簡単だけど、どれほど難しいか分かる?」

「審判の試合開始の号令と同時に動くのは、早かつたら失格になるわね。同時に動くことで相手はまだ動き出しえはしない……。なるほど。動いてない相手は止まっている標的のようなモノなのね。マイベルの言つた『勝負をしない』といつのは、そういう意味なのね」

「相手が何もしない内に一撃でノックアウトする。これがナバルが勝つために考えた結論なのよ。相手がどんな力や技を持っていたとしても、やる前に倒してしまえば関係ないわ。オクトーさんも偶然ナバルと同じ結論だったのね。でも、これには一つ弱点があるのよ

ね

「弱点? それは何なの? メイベル」

「見ての通り動きが素早いから、審判さんたちは『号令の前に動いた』とミスジヤジしやすいのよね。大会前に、あたしは映像判定を導入するように提案したんだけど、審判さんたちは自分の審判としての判定技術に自信を持っているから、受け入れてくれなくて……」

「あつ! ? 今分かつたけど、メイベルが最初黙り込んでいたのは、勇者くんの試合を見逃さないためだつたのね?」

「その通りよ。一瞬で終わっちゃうんだもの。話すこと夢中になつていたら見逃しちゃうわ。まあーここからは、張り切つて話すわよー!」

「あつ! ? 映像判定の結果が出ました! ナバル選手の勝ちです。特別ゲストの聖女メイベルさま、ありがとうございました。続けて第五試合に……」

メイベルがいつものように長々と話を始めようとしているのが分かつたレジーナは、強引に話を締め括つとした。

「えーつ! ? まだ、話し足りないわよ。まずはねえ……」

メイベルはマイクをガツチリとつかんで、なかなか放そうとしなかつた。

結局、試合を終えたナバルが放送席に来て、メイベルに見事なツツ「ハハ」を決めるまで、長々とメイベルの話は続いた。

メイベルとナバルが放送席から去つてから、レジーナはまたしても相手選手の紹介を忘れたことに気づいた。

剣術大会の日程は、順調に進んでいった。

ナバル、オクトー、ブルー、クラウの四人は勝ち進んでいった。

ナバル、オクトーの一瞬の一撃、ブルー、クラウの超低空飛行魔法に誰も対抗できず。他の選手たちは次々と敗れ去った。

大会のベスト四が出揃った。

「実況担当のレジーナです。お聞きください。この大歓声！本日は試合はありませんが、準決勝の組み合わせを決める抽選があります！」

レジーナは一呼吸した。

「ナバル、オクトー、ブルー、クラウ、四人の選手が進出した準決勝では誰と誰が戦うのか？今、帝国全土の注目を集めています！明日の休養日を一日挟んで、明後日の午前中には準決勝第一試合が、

午後には準決勝第一試合がおこなわれます。あつ！？四人の選手が入場してきました

さらに大きな歓声が起きた。

「四人の選手が中央にあるくじの入った箱に向かいます。くじを引く順番を決めるための抽選はすでにおこなわれており、オクトー選手、ナバル選手、ブルーノ選手、クラウ選手の順番になります」

オクトーは箱に手を入れて、一枚のくじを引いた。

神官はくじを受け取ると、場内放送で発表した。

「オクトー選手、第一試合」

続いて、ナバルが引いた。

「ナバル選手、第二試合」

レジーナがマイクに向けて大声をだした。

「前回の大会の決勝戦を戦つたオクトー選手、ナバル選手の対決は、一人が勝ち進めば再び決勝戦となりました！一人の決勝進出をそれぞれ阻止するのは誰になるのか！？」

「ブルーノ選手、第一試合」

「これで、準決勝は第一試合がオクトー選手対ブルーノ選手、第二試合はナバル選手対クラウ選手になりました。では、放送をお聞きのみなさま、明後日の放送をお楽しみに！」

次の日の休養日、オクトーは帝都サクラス市内にある屋敷の中庭で木刀を構えていた。

そこに、アステルが訪ねて来た。

## 第十一章 帝国剣術大会 その4（後書き）

ご感想・評価をお待ちしています。

広大な屋敷の中庭でオクターは木刀を構えたまま、長い時間微動だにしなかった。

アステルは黙つてそれを見ていた。

一時間近くオクターは、そのままの姿勢でいたが、いきなり片足を前に踏み込んで、木刀を振り下ろした。

その一つの動作だけで、オクターは剣の稽古が終わつたらしく、木刀を腰の鞘に戻した。

そこでオクターは、よつやくアステルに気づいたらしく振り向いた。

「アステル殿。来ていたのならば、声をかけてくだされば良かつたのに」

アステルは微笑んだ。

「稽古の邪魔しちゃ悪いと思つたのよ」

そして、アステルは周囲を見回して手を大きく広げた。

「それにしても広いお屋敷ね。この前までこのお屋敷空き家だつたと思うんだけど、どうしたの？またか空き家に勝手に入り込んでいるんじや？」

オクターは首を横に振つた。

「もちろん。違う。私が買ったのだ」

「オクトーさんが、買った！？」

アステルは驚いた。

なぜなら、帝都サクラスは超過密都市であり、当然不動産は高い値段で取り引きされており、これだけの広大な屋敷だとかなりの高額になるからである。

「いつまでも近衛隊の詰所で世話になっているわけにもいくまい。地図を調べたら、この屋敷の中庭が剣術大会の試合場とほぼ同じ大きさでな。剣術の稽古に便利だから買ったのだ」

「オクトーさん。わたしが驚いたのは、そこじゃなくて。これだけの屋敷だと、かなりの値段になるでしょ？ お金はどうしたの？」

「もちろん。自分の金で買った」

「オクトーさんのお金！」

アステルはまた驚いてしまった。

相変わらず顔を覆うほど髪と鬚を伸ばしていて、熊の毛皮の服を着ているオクトーを見ると、とても大金を持っているようには見えないからだ。

「あつ！？アステル殿。私が大金を持っているのを不思議に思つてゐるな？」

「ええ。失礼だけど……」

「私が大金を持つている」との理由の説明は簡単だ。私は西アルテス公国の前公王だつたビーズマス卿のお抱え剣士だつたのだ。当然給金は支給されていた

「オクターさん。失礼だけど、年収はどれぐらいだったの？」

オクターの口にした金額を聞いて、アステルは驚いた。

普通の人間が一生で稼ぐ金額に匹敵するからだ。

驚いているアステルに向けて、オクターは笑つた。

「それだけの給金が貰えるのは、一流の剣士として現役でいられる間だけだ。剣術大会の成績が悪ければ、当然給金は下がるし、ケガで引退すれば次の年の剣士としての収入は下手をすればゼロになる。大金を稼ぐことを目的にするのならば、他にもっと割りの良い仕事があるだろう」

「なら、どうして？ オクターさんはビーズマス卿のお抱え剣士になつたの？」

「それは……」

オクターは遠い過去を思い出すように、視線を遠くに向かた。

「私の父親は、剣術で出世しようとして途中で挫折した男だつた。父は自分のかなえられなかつた夢を私に託した。幼い頃から私は父

から剣術のスバルタ教育を受けて育つた。子どもらしい遊びなど、何もさせてもらえなかつた」

アステルは同情する顔になつた。

「剣の稽古ばかりで辛かつたんじゃない？」

オクトーは首を横に振つた。

「辛くはあつたが、両親は貧しい中で高い月謝のかかる一流の剣術道場に私を通わせた。私は両親の期待に何としても答えようと思つた」

「オクトーさんはビーズマス卿のお抱え剣士になつたのだから、見事にご両親の期待にこたえたのね。今、ご両親は、どうしているの？」

アステルの質問に、オクトーはさらに視線を遠くに向かへた。

「私がビーズマス卿のお抱え剣士になることが決まつた時、前渡しされた支度金で今まで行つたことのない高級レストランで三人で食事をすることにした。両親は普段まったく飲まないワインを飲んで、嬉しそうに酔つていた」

オクトーは一度言葉を切つた。

「その帰り道、酔つて千鳥足だった両親は車道に飛び出してしまい。馬車に轢かれて死んでしまつた」

「こめんなさい。悪いこと聞いちゃつたわね」

アステルは頭を下げた。

「謝られる必要は無い。全部過ぎ去ったことだ」

オクトーは場の雰囲気を変えようと、明るい声を作った。

「ところで、アステル殿。私に何の用で来たのだ？」

「それなんだけど……」

アステルは真剣な表情になつた。

「オクトーさん。あなたは左目が見えないんじゃないの？」

同じ頃、帝都サクラスにあるホテルのカーテンを閉めきつて薄暗く  
した一室では若い男女の声がした。

「ブルーノ。そこはもう少し丁寧にあつかつて、デリケートなんだ  
から」

「分かりました。エミー」

明日の準決勝第一試合のオクトーの対戦相手であるブルーノとその  
妻のエミーの声だった。

一人は昨日の抽選会が終わると、すぐに泊まっているホテルの部屋に戻った。

それから部屋をカーテンで閉めきつて薄暗くして、一人きりで部屋に籠もっている。

食事はルームサービスで済ませていて、昨日以来一人は一步も部屋から出でてはいない。

「あつ！？ちょっと！止めて！ブルー！ノ！」

エミーが大声を出した。

「そんなに乱暴に入れようとしたら、壊れちゃうわよ！もうっ！ブルー！ノつたら美男子のくせに、意外とこういふことは不器用なんだから！」

エミーは怒ったような声を出しているが、同時にブルーに甘える雰囲気もあつた。

「わたしが美男子であることと、こういふことの得意不得意は関係無いでしょ？？」

エミーは明るい声で笑つた。

「えーっ！？ブルー！ノ。自分で自分のことを美男子って言っちゃうんだ？自意識過剰じゃない？ブルー！ノつたら、結構ナルシストなんだ」

エミーが軽く相手をからかう口調で言つたのに対し、ブルーも

からかいつ口調で返した。

「わたしのことは美男子だと、HIIーは何度も言つて居るではないですか？」

「嘘をついたのならともかく、本当にことを言つて責められるなんてことはないでしょ？」

HIIーは両手で軽くブルーーの顔を挟んだ。

ブルーーも両手でHIIーの顔を挟んだ。

「HIIーも美人ですよ」

HIIーはブルーーのその言葉に少し不安そうな顔になつた。

「あの……、ブルーー。本当にあたしと結婚して満足しているの？」

「何を突然言つのですか？HIIー。気づかないつちに、わたしが夫として失格なことをしてしまつたのですか？ならば言つてください。直しますから」

HIIーは首を激しく横に振つた。

「ううん。そうじゃないの。問題があるのは、あたしの方なの。ねえ、正直に言つて、ブルーー。あたしのこと本当に美人だと思つているの？」

「もちろんですよ」

ブルーは微塵も迷いの無い明るい声で、Hリーの質問に答えた。

その答えに、Hリーはますます不安そうな顔になった。

「Hリー～さつきから何を不安に思つているんですか？わたしたちは夫婦なのですから心配事があるのならば、きちんと口に出してお互いに協力して解決しましょ～」

「分かったわ」

Hリーはうなづいたが、言つてすぐその顔になつて数十秒黙り込んだ。

ブルーはエミーを急かすような」とはせざ。Hリーが自分から口を開くのを待つた。

「あのね……、ブルー……」

Hリーはようやく口を開くと、窄り出すような声を出した。

「ブルー……、あなた……、口コロンじゃないわよね？」

Hリーの言葉に、ブルーは硬直してしまい。十数秒間、何も反応できなかつた。

ようやく我に返ると、ブルーは思わず大声を出していた。

「な～何を言つているのですか～Hリー！わたしが一度でも、Hリーを幼女あつかいしたことがありましたか？」

エミーは慌てて首と両手を振った。

「『めんなさい。あたしの言葉の選択が悪かったわ。あたしは子どもあつかいされるのは嫌だけど、客観的に見て十歳代初めにしか見えない体をしているのは分かっているの。ブルーノと一人で街を歩いたら兄妹と思われるし、ブルーノと一人でレストランに入つたらワインを注文したのに、あたしにだけジュースを持つてくるし、あたしが一人で街を歩いていると、男子小学生にナンパされるし……』

「エミー。つまりは、何が言いたいのですか？」

エミーが延々と愚痴を続けそうになつたので、ブルーノが口を挟んだ。

「つまり、こんな幼女のような体で『大人の男』のブルーノを満足させられているかが心配なのよ」

ブルーノは大きく息を吐いた。

「いいですか？ エミー。例えば、逆にエミーが二十歳代の『大人の女』の体をしていて、わたしの方が『十歳代初めに見える体』だとしたら、エミーは不満ですか？」

「ブルーノが十歳代初めの体……」

エミーは自分の頭の中の想像で、とても幸せそうな顔になった。

「分かつたわ。ブルーノ。あたし余計な心配をしていたわ

「それでは、続きをしましょう。エミー。入れますよ？」

「うん。優しくしてね」

何かが擦れるような音がした。

「もう！ブルー！乱暴にしないでって、言っているでしょ！映写機が壊れちゃうわよ！」

ブルーは映写機にフィルムを入れようとしていた。

「案外難しい物ですね。しかし、オクター選手の記録映像を何度も見て確信が持てました」

「あたしも同じよ。やっぱりオクター選手は左目が見えてはいないわ」

同じ頃、帝都近衛隊の詰所にいるクラウをレジーナが訪ねていた。

レジーナはクラウが訓練場で、剣の練習をしてると思っていたが、クラウは自室にいるとクラウの部下が言った。

少し意外に思いながら、レジーナがクラウの部屋を訪ねると、クラウは机に向かって何か読んでいた。

「クラウ。何を読んでいるの？」

「日記ですか？」

「そうです。ナバルに初めて会った時に僕が書いた日記とメイベルちゃんに初めて会った時に僕が書いた日記です。読み返して、その時のことを思い出しているのです」

## 第十一章 帝国剣術大会 休養日 その1（後書き）

ご感想・評価をお待ちしています。

「そう言えば、クラウと勇者くんとの初めての出会いについては聞いたことなかつたわね。どんなだつたの？」

レジーナの質問にクラウが答えた。

「僕がナバルと初めて会つたのは、僕が小学校に入学する前の年に開かれた御前試合だつたんです」

「御前試合？」

「そう。僕の父、コーベラス公国のアキロキヤバス公王が僕と同じ年の子どもを集めて、子どもの剣術大会を開いたんです」

「子どもの剣術大会なんて、危険じやないの？」

クラウは、首を軽く横に振つた。

「剣は安全のために紙をまるめた物でした」

「それで、その大会にクラウと勇者くんが出場したのね？」

「決勝戦で、僕とナバルが対戦したんです。それが、僕とナバルの初めての出会いでした」

「それで?どつちが勝つたの?」

クラウは一瞬言いにくそうな顔になつたが、答えた。

「ナバルの勝ちでした。僕の完全な敗北でした」

「戦つている内に、お互に友情が芽生えたわけね？」

クラウは首を横に振った。

「いいえ。ナバルがその時僕のことをどう思つたのかは知りませんが、僕はナバルのことを憎く思いました」

「それは、どうして？」

「ナバルに負けるまで、僕は同じ年の子どもに剣で負けたことなかつたんです。今から思うと恥ずかしいですが、それまで僕は自分を『史上最強の剣士』だと思っていたんです」

「史上最強の剣士ですって！？」

レジーナは思わず吹き出して、笑ってしまった。

クラウは、レジーナを軽くにらみつけた。

「レジーナちゃん。人が真剣な話をしているのに、笑うなんて、酷いですよー！」

「『めん。』『めん。』でも気持ちは分かるわ。幼い頃は誰もが物語の中のヒーローやヒロインのようになれるものだと、思つているものね」

「話を戻しますが……」

クラウは平静に戻った。

「僕は幼いプライドをズタズタにされて、勝負が着いた後も、自分が負けたのを認められなくて、ナバルに向けて剣を振りまわしたんです。結局、僕があきらめるまで戦いは続きました。今から考えると、それが父の狙いだったと思います」

「アキロキヤバス卿の狙い？」

「はい。幼い頃、僕の周りにいる子どもは全員、父が魔王であるコベラス公国の臣民なのですから、僕と剣術試合をする時は、親から手加減するように言われていたのでしょうか。今から考えるとあの頃の相手は、みんな弱過ぎました」

レジーナは気づいたことを口にした。

「分かったわ。アキロキヤバス卿が御前試合を開いた狙いが！大勢の子どもを集めれば、中には『空気を読まずに』クラウと本気で戦う子どももいると考えたのね？」

クラウは笑った。

「確かに『空気を読まない』という意味では、ナバルは適任でした。父の目論み通りに、僕は世の中の厳しさといつモノを知ることになりました」

「それで、クラウが勇者くんと仲良くなつたのは、いつなの？」

「これから、仲良くなつたのか……、そう言えば、いつからなんで

「ショウ？」

クラウは考え込んだ

「僕が入学したユーベラス王立学校に、ナバルも剣術特待生という扱いで入学したんです」

「それで、学校で仲良くなつたのね？」

クラウは、首を軽く横に振つた。

「いいえ。僕はナバルをライバルとして見ていた、張り合っていたんです。剣術だけではなく、小学校では運動会の駆け競べや騎馬戦で、水泳大会の競泳や潜水で、ナバルに勝負を挑んだんです」

「結果は、どうだつたの？」

「運動に関しては、僕はナバルに勝てたことは無いんです。勉強については、僕の方がナバルより上でしたが、小学校、中学校、上級校と僕とナバルは、ずっと同じクラスで、その状態が続きました」

「ずっと同じクラス？偶然で、それはありえないんじゃない？」

レジーナの言葉に、クラウはうなづいた。

「はい。今から考えると、おそらく僕の父が裏から手を回して、僕とナバルが同じクラスになるようにしたのでしょうか。僕がナバルと競い合うことで、自分を鍛えるように仕向けてたのでしょうか」

「それで、今はクラウと勇者くんは親友なのよね？」

「はい。もちろん。そうです」

「話を戻すけど、一人が親友と呼べる仲になつたのは、いつからなの？」

クラウは、また考え込んだ。

「いつから親友になつていたのかは分かりませんが、僕がナバルと親友だつたんだと分かつた瞬間ならあります」

「親友だと分かつた瞬間？」

「はい。学校を卒業して、ナバルが地元に残ることになり、僕が帝都近衛隊に入隊するために帝都サクラスに旅立つ時のことでした」

クラウは、遠い記憶を思い出す顔になつた。

「僕は『これでナバルと別れられる』とむしろ清々した気分でした。でも馬車に乗る直前に、ナバルが見送りに来て、笑顔で『元氣でなと言つたんです』

クラウが遠くに向ける視線は、古き良き思い出へのモノだった。

「ナバルのことですから一言そつ言つただけで、餞別に何か僕に特別な物をくれたわけじゃありませんでしたが、馬車が走り出した途端に、僕は泣いてしまいました」

レジーナは、慈しむ目でクラウを見た。

「自分が本当は別れを悲しんでいることが、分かつたのね？クラウ

「そうです。レジーナちゃん。僕が泣いたことをナバルに話しかやダメですよ。これは誰にも言つたことなかつたんですから」

「分かつたわ。でも誰にも話さなかつたことを、あたしに話してくれるつてことは、それだけ、あたしを信用しているつてことね？」

レジーナは、意味深な笑みをクラウに向けた。

「そうですよ。レジーナちゃんは人の秘密を言い触らすような人じや、ないでしょ？」

「そう思つてくれてるんだ」

レジーナは、微笑んだ。

クラウは、レジーナの微笑みに気づくことなく話を戻した。

「だから、ナバルが帝都近衛隊の入隊試験を受けるために帝都に来て、再会できたのは嬉しかつたんです。帝都をナバルに僕が観光案内している時に、僕がメイベルちゃんをナバルに紹介したんですが……」

クラウは苦笑いした。

「それが僕の人生での最大の失敗かもしません。まさか、ナバルが僕の恋のライバルにもなるとは、しかも完全に僕の負けのようです」

レジーナは、疑問を口にした。

「クラウは、勇者くんとメイベルの関係が壊れるよくなことはないと、思つていのね？」

「はい。あの一人の絆は、僕がどうにかしたって、壊れるようなモノではありません」

「でも、クラウがメイベルのことを諦めてるよとは見えないのだけど？」

クラウは、自嘲する顔になつた。

「理屈では納得していくも、感情の方が納得していないという状況なんです。自分で情けないですが、感情も納得するとしたら、その時を待たなければならぬでしょ？」

「その時つて、いつなの？」

「メイベルちゃんとナバルの結婚式です。その時、僕は人前で恥ずかしくなるほど大泣きして、メイベルちゃんのことを本当に諦められるでしょ？」

「そりなんだ。じゃあ、クラウは新しい恋をする気はあるのね？」

「はい。そのためにも、あの一人には早く結婚の当たりくじを引いてもらいたいのです」

レジーナはクラウの言葉に納得するよつこ、何度もうづなづいた。

「それなら、剣術大会で勇者くんと戦うのは、メイベルとは関係無いのね？」

「はい。純粹にナバルと剣術で勝負を着けたいだけです」

その言葉につなづくと、レジーナは真剣な表情になつて、クラウに質問した。

「最後にもう一つ質問なんだけど、クラウとメイベルの最初の出会いはどんなで、何故、クラウはメイベルを好きになつたの？」

クラウも真剣な表情になつて答えた。

「それは僕の大事な思い出なので、僕の心の中に大切にしまつておきたいんです。レジーナちゃんにも話せません」

「そう……、分かったわ。無理には聞かないわ

レジーナは少し寂しそうな声で応じた。

「ところで、レジーナちゃんは、僕に何の用で来たのですか？」

「クラウに聞きたいことがあったの。それは、もう済んだから帰るわ。明日の試合頑張ってね」

マイベルとナバルである。

中央市場は緩やかな階段状に作られた大きな広場にあり、数多くの露店が所狭しと並んでいて、大勢の人たちで溢れていた。

「ねえ？ナバル。この場所覚えている？」

「俺とマイベルが初めて会った場所だろ？」

「覚えててくれたんだ！」

マイベルは笑顔になつた。

いつもはマイベルは聖女服、ナバルは近衛隊の制服を着ているが、今は目立たないよう普通の服を着ている。

「ここにナバルともう一度一緒に来たかつたんだけど、なかなか時間が取れなくて、やつと今日来れたわ」

「ここにマイベルとパセラさんが買い物をしていて、クラウに観光案内されていた俺が通りかかって……」

突然、ナバルが黙り込んだ。

「どうしたの？ナバル。突然、黙つたりして？」

「マイベル。俺はここでクラウにマイベルに紹介されたんだよな？」

「そうよ」

「と聞つことは、クラウとは俺より前から知り合いだつたんだよな？」

「当たり前じやない」

「今まで聞いたことなかつたが、メイベルとクラウとの初めての出会いは、どんなだつたんだ？」

メイベルは「えつー？」といった感じの顔になつて、考え込んだ。

「そう言えば、どいかでクラウさんとは最初の出会いをしているはずよね。うーん。思い出せないわね。何で、このこと聞くの？ナバル」

「クラウはメイベルに会つたびに、愛の告白してくるだろ？」

「そうね。わたしの方が恥ずかしくなつつけられど」

「でも、メイベルはクラウと付き合つてはならなかつたんだな？」

「うん。全然、そんな気にならなかつたわ」

「メイベルのことをハッキリと好きだと言わなかつた俺の方を、好きになつてくれたのは、何故だ？」

メイベルは愛しい人を見る目になつて、ナバルを見つめた。

「理由なんて無いわ。だけど、わたしが『ナバルが好き』という気持ちは確かにここに有るわ」

メイベルはナバルの右手をつかんで、自分の心臓の上に押しつけた。

「心臓が激しく動いてるでしょ？ナバルと一緒にいるだけで、こんなにドキドキしているのよ」

「『心臓は血液を体内に循環させるためのポンプ』って言ったメイベルにしては、非科学的な答えだな」

「恋する気持ちは科学じゃ、計れないわ」

二人は、手をつないでしばらく市場を見物して回った。

帝都サクラスで、夕日が沈み、朝日が登つて來た。

帝国剣術大会準決勝当日となつた。

午前中に行われる第一試合は、オクトー対ブルーノである。

## 第十三章 帝国剣術大会 休養日 その2（後書き）

ご感想・評価をお待ちしています。

## 第十四章 帝国剣術大会 準決勝第一試合 オクトー対ブルーノ

帝国剣術大会に出場する選手は、ソルティス教会の医療係による健康診断を受ける。

試合当日の朝に行われるそれで、身体に異常があると診断されれば、ドクターストップになる。

「オクトーさん、やっぱり、あなたは左目を失明してくるのね？」

帝立競技場内の医務室で、ティアマリアは診察を終えると、厳しい目でオクトーを見た。

「その通りだ。私の左目は一年ほど前にケガが原因で、まったく見えなくなつた」

オクトーは、あつさりと認めた。

「今までの試合前の視力検査は、どうしてたの？……って、愚問だつたわね。両目の視力を検査はするけど、片目ずつはしないものね」

「ところで、私の左目が失明しているのに、何故気づいたのだ？」

オクトーの質問にティアマリアは答えずに、同席しているアステルの方を見た。

アステルが口を開いた。

「オクトーさんは、額中髪の毛と髭で覆われているから分かりづら

かつたけど、一緒に書類の整理をしてもらつた時に気づいたの、オクトーさんが右目だけで書類を読んでいることに「

「なるほど、それを知られのを避ける目的もあって、顔を髪と髪で覆つていたのだがな」

「それにしても、医療係のわたしが気づかなかつたのに、天文係のアステルが気づくなんて……」

ティアマリアは悔しそうだつた。

「それは単純に私と一緒にいた時間の長さの違いであろう。ティアマリア殿は剣術大会で選手に負傷者が出了場合に備えて、大会中は競技場でずっと待機していたので、私とほとんど会わなかつたが、私の試合が無い日はアステル殿の仕事を、私は手伝つていたからな」

ティアマリアは、オクトーの言葉にうなづいた。

今度は、アステルが質問した。

「でも、左目が見えないのに、今までの試合は、どうやつて勝つてきたの？」

「試合開始の時は、相手は必ず真つ正面にいる。左目が見えなくても関係無い。最初の一撃で私が勝負を決めていたのは、私の弱点をカバーする意味もあつた」

ティアマリアは、オクトーをさらに厳しい目で見た。

「とにかく、オクトーさんの左目が失明していると分かつた以上は、

わたしは医師としてドクターストップを宣告……」

「私にドクターストップを宣告することはできないぞ。ティアマリア殿」

「それは、何故?」

「帝国剣術大会には、過去には片目が失明した選手が出場した前例がある。前例がある以上、私に場合も同じようにあつかわれるはづだ」

アステルが口を挟んだ。

「その記録は、わたしも読んだわ。オクトーさんと一緒に書類を探したのだもの。でも、その選手は失明した目の側に対戦相手が回り込んで、負けているじゃない!わたしたちはオクトーさんの目のことを言い触らすつもりはないけど、勇者くんたちに気づかれたら、どうするの?」

「ナバルだけでなく、ブルーノ殿やクラウ殿も、三人とも剣士として一流だ。とつくに私の目のことには気づいているだろ?」

「だつたらなんで?負けると分かっているのに、試合に出ようとするの?意地とかプライドのため?」

「アステル殿」

オクトーは厳しい声を出した。

「私は『プロ』だ。『やつてみなくちゃ、分からぬ』とか『一か

ハカの勝負』が許されるのは『アマチュア』だと、私は思っている。私なりに勝算があるから試合に出るのだ』

オクトーは、アステルとティアマリアに説明を始めた。

その日、帝国剣術大会準決勝第一試合が始まる時刻が近づくと、サクラス帝国全土の教会や広場にある有線放送の受信機、そして高価であるためまだ数は少ないが、一般家庭にある受信機のほとんど全てが一斉に同じチャンネルに合わせられた。

「サクラス帝国全土のみなさま、こんにちは。こちらは帝都サクラスにあります帝立競技場。間もなく帝国剣術大会準決勝第一試合オクトー選手対ブルーノ選手が行われます。わたくしは実況担当のレジーナ・テルルです」

受信機のスピーカーから、レジーナの声が流れた。

「解説はおなじみのクリプトン卿です。そして今回は特別ゲストを二人、放送席にお招きしています。アステル・ラガナンさん。エミー・アサツシニオさんお願いいたします」

「よろしくお願いします」

「じゅうじゅうや、よろしくお願いします」

アステルとエミーの声が流れた。

「さて、Hミーさんはブルーノ選手の奥さまとして全国的に有名になりましたが、アステルさんについては放送をお聞きになつている皆さまの中には知らない人もおられるかと思うので、解説いたします」

「」で、レジーナは一拍おいた。

「アステル・ラガナンさんは、ソルティス教聖サクラス教会の女性神官であり、星の四つの天文係で、時計係を務められており、毎日のように太陽を観測して、正確な時刻を計算し、帝国標準時を決めております。まさしくアステルさんが決めた時刻に従つて、帝国は動いているのです」

「もうっ！大げさよ。レジーナさん」

アステルは笑つた。

「さて、アステルさんはオクトー選手が修行されていた山の中で出会い。帝都サクラスに一緒に来られてからは、オクトーさんに書類の整理を手伝つてもらつてているそうですね？普段のオクトーさんは、どんな感じなのでしょう？」

「生真面目な人つてところね。剣の練習をしている時も、わたしと二人きりで書類の整理をしている時も、ものすごく集中していて、他の事は気に掛けないわね」

「ねえ、ねえ、アステルさん」

Hミーが興味津々な感じで、アステルに声をかけた。

「何ですか？ ハリーさん」

「アステルさんは、オクトーさんと『入り口』になると多いの？」

「はい、天文係の書類の整理の時に……」

「その時、変な気持ちにならない？」

「変な気持ちって、何ですか？」

「もう少しだけ…恋愛感情持つてると…恋愛感情持つてるんじゃない？」

「なつ…？」

意表を突かれたアステルは、顔を赤くした。

「顔が赤くなつたわね。 図星だつたのかしら？」

「ハリーさん！ 変なこと言わないでください…わたしとオクトーさんはそんな関係じやありません」

「あんな『森の熊さん』みたいな人は、アステルさんの好みじゃないわけ？」

「そういう意味じゃありません！ 男女の仲を、そんなふうに言つなんて、ハリーさんは、まるで『オバサン』ですよ！」

「あたしが『オバサン』？」

アステルは「しまった！」と思つた。

世間の一般常識として「オバサン」と判断されるよつた年齢の女性でも、「オバサン」呼ばわりされると普通怒る。

HIIーはまだ二十歳代後半なので、アステルはHIIーを怒らせてしまつたと思つた。

「アステルさん。もう一度、あたしのこと『オバサン』って言つて！」

アステルの予想に反して、HIIーは顔も声も嬉しそうだった。

「オバサン」

「もつと、言つてー！」

「オバサン、オバサン」

アステルが「オバサン」と言つたびに、HIIーはますます嬉しそうだった。

「あの？ HIIーさん。『オバサン』って呼ばれて嬉しいんですか？」

アステルの質問に、HIIーは笑顔で答えた。

「ええ、嬉しいわ。あたし年下からも『お嬢ちゃん』って呼ばれるから、『オバサン』って呼ばれるの嬉しいの」

「そ、そなんですか……」

レジーナがマイクに向かつて声を出した。

「オクトー、ブルーノ両選手が入場してきました！」

アステルもエミーも、試合場に視線を向けた。

アステルはオクトーの姿を見ると、考えた。

（やだつ！エミーさんが変な事言つから、オクトーさんのことを変えに意識しちゃうじゃない！わたしにとつてオクトーさんは、何なんだろう？オクトーさんは、わたしのことどう思つているのだろう？）

アステルの思考と関係なく、試合は始まった。

主審の試合開始の合図と同時に、オクトーは木刀を前に突き出したが、ブルーノはオクトーの左目の方向に魔法で飛んで避けた。

オクトーは、アステルとティアマリアに話した勝算について思い出していた。

（私は魔法を使うことはできないが、他人が魔法を使つた時の波動を感じることができ。ブルーノ殿が超低空飛行魔法を使えば波動から位置が分かる）

ブルーノが自分の左の方に飛んだのは、オクトーにとつて予想の範囲内だつた。

（やはり、私の左目が見えないことは見破られていたか、だが魔法

の波動は感じる…それで位置が……

オクターは戸惑った。

（なんだ!? 波動が感じられなくなつた。ブルーノ殿の気配も感じない。そうか!）

有線放送の受信機からは、レジーナの実況放送が流れていた。

「ブルーノ選手！ オクター選手の左目側に飛行魔法で回り込みましたが、すぐ着地して、オクター選手の左側約十メートル離れた地面に着地してた後、亀のよひにゆつくつと歩いてオクター選手に近づいて行きます！」

「ここまでは、計算通りね」

「どうこういとなのでしょうか? ハリーさん

「記録映像を見て、オクター選手は右目だけで相手を見ていることから、左目が見えないことは分かつていたわ。だけど、飛行魔法を使う相手には左側に回り込まれても対応できている。そのことからオクター選手は魔法の波動を感じることができるもの分かったわ」

「それで、飛行魔法をすぐ止めて、地面を歩いているのですね。あの亀のような歩みは何ですか?」

「あたしとブルーノは、南アルテース軍に所属していた元軍人なの。敵の基地にこつそり忍び込むような任務もあつたわ。あの歩き方は足音も気配も消えるわ」

「なるほど、あつ！オクトー選手！ブルー選手に左側を向けたまま微動だにしません！これは、どういうことなのでしょうか？」

解説のクリプトン卿が口を開いた。

「オクトー選手は、ブルー選手の魔力の波動も気配も感じられないで、あえて動かないことで、ブルー選手の一撃を受けて、それで位置を確認してから反撃をする気だ」

「一撃でブルーは決めるわ。オクトー選手に反撃の余裕は無いわ」

ヒーは断言した。

レジーナは叫んだ。

「ブルー選手！オクトー選手の頭部に強烈な一撃！オクトー選手、頭から大出血！勝負は決りました！」

観客席から大歓迎が上がった。

「いえ……、待ってください！オクトー選手、倒れません！木刀を横に振りました。あつ！ブルー選手の左腕が不自然に曲がります！ブルー選手！審判にギブアップを申告！オクトー選手の勝ちです！」

試合終了後、オクトーとブルーは競技場の中にあるそれぞれ別の

医務室に運ばれた。

「治癒魔法で骨折した左腕はすぐに治るやうよ。運動能力を元に戻すには数ヶ月のリハビリが必要だそうだけど……」

HIIーは医務室のベッドに横たわるブルーを心配そうに覗き込んだ。

「そうですか、政治家として活動するには支障無ことこのことですね」

「やっぱり、片腕でもまだやれたのに、ギブアップしたのは、あのまま続けていたら数ヶ月の入院しなきやならない大ケガするかもしれないと思つたからね？」

「そうです。そうなれば『政治家』としての活動に支障が出来ます。わたしはもう『剣士』ではなく『政治家』なのです。そんな当たり前のことに、自分が気づくのに手間をかけてしまつてすみませんでした。HIIー」

「いいのよ。あたしたち夫婦でしょ? 前にも書いたように、あなたが何をしようとも一緒に生きていくわ」

一方、別の医務室に運ばれたオクトーは、ティアマリアの診察を受けていた。

「髪の毛と髭が邪魔で、傷口が見えにくいくわね。オクトーさん。髪を切つて、髭を剃らせてもらひうわよ。」

「ああ、構わない」

「わたしがやるわ」

アステルがハサミと髭剃りを手に取つた。

「えつー!?

髪を切り、髭を剃つたオクトーの顔を見て、アステルは驚いた。

午後からは、準決勝第一試合ナバル対クラウが行われる。

## 第十四章 帝国剣術大会 準決勝第一試合 オクトー対ブルーノ（後書き）

「感想・評価をお待ちしています。」

## 第十五章 帝国剣術大会 準決勝第一試合 ナバル対クラウ

午後から始まる帝国剣術大会の準決勝第一試合ナバル対クラウの試合開始時刻まで、残り一時間を切った。

帝立競技場内にある放送席では、放送開始前の最後の打ち合わせが行われていた。

放送席は観客席の中にある。

有線放送は数年前に発明されたばかりなので、長い伝統を誇る帝立競技場に放送のための専用の施設は元々は無かつた。

そのため将来は専用の放送席を設置する予定だが、今回は観客席の一部を区切つて、放送席が設けられていた。

放送席はもちろん関係者以外立ち入り禁止だが、他の観客席からは放送席に座る人物は丸見えである。

その放送席に向けて、大勢の観客の視線が向けられていた。

「まあ、こうなるとは予想していたけど……」

放送席にいる実況担当のレジーナは、解説のクリプトン卿と特別ゲスト一人と打ち合わせしながら、つぶやいた。

「レジーナさん。『こうなるとは予想していたけど』とは、何にですか？」

つぶやきを耳にした特別ゲストの一人が、レジーナに質問した。

「それはもちろん。ブルーーさん。あなたのことですよ」

特別ゲストの一人は、午前中に第一試合を終えたブルーー・アサツシニオであった。

放送席に向けられている視線のほとんどは、観客席の女性客からの物で、双眼鏡だけでなく、いまだに高価な写真機を使って撮影している女性客もいた。

「Hミーさんがマスクをつけて宣伝したおかげで、『ブルーーさんが既に結婚している』ことは知れ渡りましたが、それでも女性ファンは全然減つていらないそうですね？」

ブルーーは苦笑した。

「はい、少し困っています。わたしに送られてくるファンレターの中には、『Hミーと離婚して、あたしと結婚してください』なんて書いてあるのまであって、手紙の送り主に、Hミーが襲撃をかけようとするのを止めるのが大変でした」

「まあ。ブルーーさんは美男子ですからね。あたしもこうして観賞しているのは目に楽しいです。あつ！？誤解しないでください！あたしはブルーーさんに恋愛感情はまったく無いです。綺麗なお花を眺めているのと同じ感覚です」

「わたしにファンレターを送つてくる女性はほとんどは、レジーナさんと同じ気持ちでいるのでしょうか、恋愛感情と混同しているようですね」

「話は変わりますけど、こちらは予想外でした」

レジーナは観客席に目を向けた。

女性客は双眼鏡や写真機をブルーノと、もう一人の特別ゲストに交互に向けている。

「髪と髭で覆われた中には、そんな顔があつたなんて想像できませんでした」

レジーナは、もう一人の特別ゲストの顔を見た。

もう一人の特別ゲストは、オクトー・アグディカースであった。

頭部のケガの治療のために、髪を切つて髭を剃つたため、それまで髪と髭で覆われていた素顔があらわになつていて。

「大勢の人たちの視線が、私の顔に向けられているのは分かるが……、私の顔はそんなに変なのかね？」

レジーナは呆れた。

「オクトーさん。自覚はないんですか？オクトーさんもブルーノさんに負けないぐらいの美男子なんですよ！」

「なにつ！？私は美男子だつたのか！？」

オクトーの顔は、確かに美男子であった。

女装が似合いそうな女顔であるブルーノとは違つタイプの美男子である。

眉が太く、いかつい顔立ちで、野性的な感じのする美男子であった。

「オクトーさんが髪と鬚を伸ばしたのは、山に籠もつて修行してからなんでしょう？その前は、女人からモテてたんじゃないですか？」

オクトーは過去の記憶を思い出す顔になつた。

「いや、私は剣の修行一筋だつたからな。たまに私に近づいてくる女性たちは、私の顔を見ると自分の顔を赤くして、そわそわした感じになつたからな。私は女性に嫌われる顔立ちなのだと思っていた」

「オクトーさん。それは……」

（その女人たちは、みんなオクトーさんに好意を持つていたんですよ）

と、レジーナは口に出しかけた。

「そう言えば、アステル殿やティアマリア殿も、私の素顔を見たとたんに、顔を赤くして、そわそわしていたな。やはり、嫌われてしまつたのだろうか？」

そのオクトーの発言に、レジーナは口に出しかけた言葉を慌てて引つめた。

（危なかつたわ。放送開始前で良かつたわ。放送中だつたら、『ティアマリアとアステルがオクトーさんに好意を持つてる』ことが全

国に生中継されちゃうといひだつたわ）

レジーナは笑顔になつた。

「大丈夫です。オクトーさん。安心してください。ティアマリアもアステルも顔だけで人のことを嫌つたりはしません」

（ティアマリアとアステルには後でオクトーさんのことを、どう思つていいのか、聞き出さなきや。あたしは他に心に決めた人がいるから、美男子でもオクトーさんには興味ないけど）

レジーナは、オクトーの顔を見つめて考えた。

（オクトーさんは勇者くんと同じく鈍いみたいだから、一人とも苦労するかもね）

「放送開始！五分前です！」

スタッフから掛けられた声に、レジーナたちは準備した。

サクラス帝国全土の有線放送の受信機からは、おなじみになつたレジーナの声が流れた。

「こちらは帝都サクラスの帝立競技場。帝国剣術大会準決勝第一試合ナバル選手対クラウ選手が、これから行われます。実況担当は、わたくしレジーナ・テルル。解説はクリプトン卿。特別ゲストとし

て、午前中に試合を終えましたオクター選手とブルーノ選手のお二人をお招きしております」

三人の自己紹介の後、レジーナはオクターとブルーノに質問した。

「さて、お二人はこの試合でナバル選手とクラウ選手、どちらか勝つと予想していますか？」

オクターが答えた。

「私は以前、ナバル選手とクラウ選手の両者と戦つたことがあるが、もし二人の心掛けがその時そのままだったとしたら、ナバル選手の方が勝つだろう」

「『心掛け』とは何ですか？」

オクターはレジーナに答えた。

「ナバル選手は剣術の試合では、純粹に自分の修行した剣術の腕を振るうことしか考えていない。しかし、クラウ選手はどこか『格好良く勝とう』としているところがあるため、少しだが無駄な動きがある。そのため実力が下の相手だと勝てるのだが、同等の相手だと負けてしまうのだ」

「ああ、それは、わたしも感じています」

ブルーノがオクターに同意した。

「せっかく勇者くんにも匹敵する剣の腕前を持っているのに、惜しいことです」

「ブルーノ殿の言つ通りだな」

オクトーは、うなづいた。

「えつ！？お二人は、クラウ選手の剣の実力をナバル選手に匹敵するに堪えていんですか？」

レジーナは驚いた。レジーナは、クラウの剣の実力はナバルより低いと評価していたからだ。

「今回はたまたま対戦しませんでしたが、わたしがクラウ選手と戦つたとしたら、同じ超低空飛行魔法が使える者同士です。どちらが勝つかは五分五分だつたでしょ？

ブルーノに続いて、オクトーが口を開いた。

「クラウ選手がナバル選手との試合で、『格好良く勝とう』とする悪いクセを出さなければ、私が決勝戦で戦う相手がクラウ選手になる可能性は低くはない」

「なるほど、お二人のお考えはよく分かりました」

レジーナは一人の言葉から、分かつたことを考えていた。

（クラウは『格好良く勝とう』とする悪いクセがあるか……、その理由は、わたしには分かるわ）

レジーナは、貴賓席にいるメイベルを見た。

（クラウはメイベルの前では、格好付けているものね。ことじ」とハズしているけど。その悪いクセが、この試合では出なければ良いんだけど……）

観客席から歓声が上がった。

「ナバル、クラウ、両選手の入場ですー間もなく、試合開始ですー」

入場して来たナバルは、貴賓席に向けて手を振った。

貴賓席にいるメイベルは、手を振り返している。

（あの一人はやっぱり仲が良いわね。そんな一人を見て、クラウはまた嫉妬の炎を燃やしているんじゃ、ないかしら？）

レジーナは、入場して来るクラウを見た。

レジーナにとつて意外なことに、クラウはポーカーフェイスであった。

貴賓席のメイベルの方にはチラリとも目を向けることはなく、対戦相手であるナバルを見つめていた。

その目は冷静であり、何の感情も無いようであった。

「クラウ殿は、今まで見た中で一番良い目をしている。試合の勝敗にはこだわっていないようだ」

「えつ！？オクトー選手もナバル選手との決着をつけたくて試合に出るんでしょ？勝敗にこだわっているじゃないですか？」

レジーナの疑問にオクターは答えた。

「試合場の外では勝敗にこだわっている。だが一度試合場に入れば、自分が修行してきた成果を振るうことだけを考えている」

「そういうものなのですか、あつ！？ナバル、クラウ両選手が開始線につきました」

受信機の前で放送を聞いている人には、主審の「始め！」の合図が聞こえた一瞬後、何かが折れる音が聞こえた。

大歓声の中で、レジーナの声が流れた。

「放送をお聞きの皆さまに説明します。試合開始の合図と同時に、ナバル選手とクラウ選手は木刀を前に突き出し、お互いの木刀が衝突して、真つ二つに折れました。解説のクリプトン卿、こういう場合は、どうなるのでしょうか？」

「ルールでは双方の木刀が使用不能になつた場合、新しい木刀に交換して、開始線の位置について、主審の合図により試合再開となります」

クリプトン卿の解説通りに、ナバルとクラウは新しい木刀を受け取り、開始線についた。

主審の合図の後、またしても何かが折れる音がした。

「再び先ほどと同じ結果になりました！両選手の木刀が真つ二つに折れました！」

レジーナの実況に続いて、クリプトン卿が解説した。

「何度も同じことになつても、新しい木刀を受け取り、開始線から試合再開になります」

その後、受信機からは三回木刀同士が衝突して折れる音がした。

「これで五回連続して同じ結果になりました！」

競技場内は大歓声で、レジーナの実況も興奮気味だった。

「過去の記録では四回連続が最高だから、これは新記録だな。しかし、この状況はナバル選手の方が不利だ」

「何故ですか？オクトー選手。一人は互角に見えますが？」

オクトーは説明した。

「クラウ選手は超低空飛行魔法が使えるにも関わらず、これまで一切使つていない。連続して相討ちを狙うことでの、ナバル選手を迷わせているのだ」

「ナバル選手を迷わせているとは？」

「ナバル選手にとつては、クラウ選手が超低空飛行魔法を『使う』か『使わない』でまったく違う対応をしなければならない。予測がハズレたらナバル選手が負ける。今までナバル選手は五回『使わない』と予測して当たつたが、次はどうちなのかナバル選手も迷つているだろう」

「なるほど、オクトー選手。よく分かりました」

レジーナは、視線を試合場に戻して実況した。

「ナバルとクラウ両選手、係員より新しい木刀を受け取っています。ナバル選手はクラウ選手を静かに見つめています。クラウ選手は貴賓席のある方向に目を向けて……、馬鹿！クラウ！」

レジーナが素の自分の声を出した後、再開された試合で決着がついた。

勝者は、相手が超低空飛行魔法を使うことを予測して、それが的中したナバルであった。

（クラウが今日初めて貴賓席のメイベルを見たことで、勇者くんには、クラウが『次で決めよう』としていることが分かったのね。クラウの『メイベルの前では格好つける』悪いクセが出てしまったわね）

休養日を一日挟んで、帝国剣術大会最終日、決勝戦オクトー対ナバルが行われる。

## 第十五章 帝国剣術大会 準決勝第一試合 ナバル対クラウ（後書き）

ご感想・評価をお待ちしております。

次回が最終章の予定です。

私が書く「くじびき勇者さま」の一次創作も、次回で終わりの予定です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8639p/>

くじびき勇者さま 外伝 誰が真優勝者だ！？

2011年10月18日00時07分発行